

教師として成長し続けるために

ベテランの先生に贈る20のメッセージ



横浜国立大学教育人間科学部附属
教育デザインセンター

はじめに

横浜国立大学教育人間科学部

学部長 小野康男

今、学校教育は、社会から期待されていると同時に、厳しく見られている面もあります。それは、教師に対しても同じです。

大学を卒業して教師になっても、すぐにうまく授業ができるとは限りません。なぜなら、教師は児童生徒と一緒に、成長しながら「教師になっていく」ものであるからです。まさに、「子どもと共に教師は成長し続ける」と言ってもよいでしょう。

そう考えたとき、教員養成を担う大学の使命も明らかになってきます。それは、生涯にわたって学び続ける人材、しかも子どもたちと共に学び続ける人材を育成することです。そのためには学生に、学校現場の実情や子どもたちの姿を、具体的・実感的に理解させることが大切です。

教育人間科学部では、文部科学省特別経費「教育デザインセンターをハブとした都市型総合大学における教員養成システムの構築」という5か年計画の事業に、本年度より取り組むことといたしました。この事業においては、実践的指導力育成のための評価基準である「横浜スタンダード」の作成や、学部・大学院における教員養成に向けた一貫カリキュラムの開発、モデル教室の構築とそれを用いた授業シミュレーションなどに取り組んでまいります。

その事業の一環として編纂されたのが本書です。

本書は、学生や大学院生のテキストとして活用することも視野に入れてはおりますが、直接的には現職の教師に向けたメッセージとなっております。

各地の教育委員会や学校においては、従前以上に、現職教育に力を入れておられると聞きました。変化の激しい時代にあって、経験に頼るだけの教育では次々と押し寄せてくる課題に対応できないことが明らかになってきたからでしょう。これからの教師には、時代の変化を見据え、常に自己変革をしていくという、新しい専門性が求められています。そうした時代にあって、これからを生きる教師を育成していくためには、大学教育と現職教育の二方向からの、しかも双方が連携しての取り組みが必要であると考え、この冊子を作成いたしました。つまりこの冊子を、大学教育と現職教育の架け橋にしたいと考えたのです。

本書が、多くの先生方や学生の皆さんにご愛読いただけること、そして読んでくださった皆さんの、教師としての力量形成や意欲の向上に少しでも役立ってくれることを、心より願っております。

末筆ながら、本書の編集・発行に当たり多大なご尽力を賜りました、神奈川県・横浜市・川崎市・相模原市・横須賀市はじめ各地の教育委員会と、「現職教師の声」欄に玉稿を賜りました多くの現職の先生方、また横浜国立大学教育人間科学部の教職員の皆様に、衷心よりお礼申し上げます。

目次

はじめに	1
目次	2
活用の手引き	3
コラム	4

第1章

ライフステージに応じて求められるマネジメント能力を身に付けるために

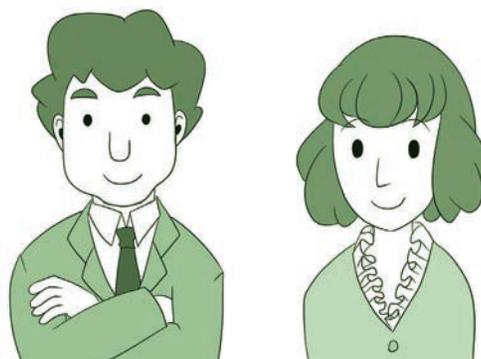
教師生活を振り返ってみよう ～これまでの経験をこれからに生かす～	6
学校マネジメントを常に意識しよう ～連帯感や活力のある学校をつくる～	8
創造的なリーダーになろう ～「なべぶた」型組織におけるリーダーの役割～	10
時代の変化、子どもの変化に敏感になろう ～経験頼みは両刃の剣～	12
自分の教育実践を伝えていこう ～技術だけでなく、思いも伝える～	14
失敗体験を語っていこう ～それがコミュニケーションにつながる～	16
ICTの活用に積極的に取り組んでみよう ～経験知がプラスされることで、ICT活用の効果がアップする～	18
若い人たちの相談に乗ろう ～自分もかつて通ってきた道～	20
報・連・相を大切にしよう ～「慣れ」は味方であると同時に敵でもある～	22
地域に信頼される学校をつくろう ～子どもは学校だけでは育てられない～	24
コラム	26

第2章

これからの時代に求められる授業力を身に付けるために

これからの時代に求められる学力を育てる授業を ～時代が変われば学力観も変わる～	28
付けたい力を明確にした授業を ～「初めに教材ありき」から「初めに付けたい力ありき」へ～	30
子どもに目標・学習活動・評価を示す授業を ～問題解決能力を高める～	32
評価を大切にした授業を ～「価値を決める評価」から「支援のための評価」へ～	34
学習の見通しと振り返りを大切にした授業を ～メタ認知能力を育てる～	36
単元を通して学力を育成する授業を ～一時間の授業から単元の授業へ～	38
学習課題を工夫した授業を ～子どもたちの学習意欲が高まる課題づくり～	40
「わからない」を大切にした授業を ～一部の子どもたちだけと授業を進めない～	42
共に学び合う授業を ～教室という空間のすばらしさを実感させる～	44
教師にとっても楽しい授業を ～つまらなそうな表情の教師から楽しい授業は生まれない～	46

活用の手引き



◎二人の会話が出発点です。この二人は、皆さんの進むべき方向性を指し示してくれる人ではなく、皆さんと一緒に悩んだり考えたりする同僚です。

1. 本書の構成

本書は、

「第1章 ライフステージに応じて求められるマネジメント能力を身に付けるために」

「第2章 これからの時代に求められる授業力を身に付けるために」

の2つの章からなっています。

第1章では、教師としてのライフステージに応じて、日頃意識しておきたいことや日々の行動で心がけたいことなどを、10の項目に分けてまとめてあります。マネジメントなどという難しいことのように聞こえるかもしれませんが、本書では、「学校にかかわるすべての人々を生き生きさせ、学校の教育効果を高めていくこと」という意味で使っています。なお、教師としての役割はライフステージによって変わってくるとの考えから、第1章のみ、「若手編」「中堅編」「ベテラン編」に分けてあります。しかし、年代や経験年数で区分したものではありませんので、ご自分に必要と思われる巻を選んでお読みください。編集部としましては、できれば全巻お読みくださることを願っております。

第2章では、これからの時代を生きる子どもたちにどんな力を付けていったらいいのかを考察し、学力や評価のとらえ方、単元や授業の構成の仕方などについて、こちらも10の項目にまとめてあります。日常の授業をどう変えていくべきかについて、なるべく具体的に示すよう心がけました。なお、第2章は、「若手編」「中堅編」「ベテラン編」に共通の内容となっております。

「教師になるより、教師であり続けるほうが難しい」

という言葉があるそうです。子どもたちに「生きる力」を育てることのできる教師であり続けるために、一緒に学んでいきましょう。

2. 本書の活用

本書は「ハンドブック」の形式をとっています。ですから、必要に応じ、どこからお読みいただいても構いません。しかしながら、項目の配列については前後で関連性を持たせるように配慮してありますので、できれば初めから順を追って読まれることをお勧めします。

また、各項目の最後には、「現職教師の声」というコーナーが添えられています。これは、本書の原稿を読んでいただいた先生方にご執筆いただいたものです。この本と学校現場との距離を縮めたいとの思いからご執筆をお願いしました。ここから読み始めるのも、本文の内容を身近に感じるための一つの方法かもしれません。

3. コピーなどについて

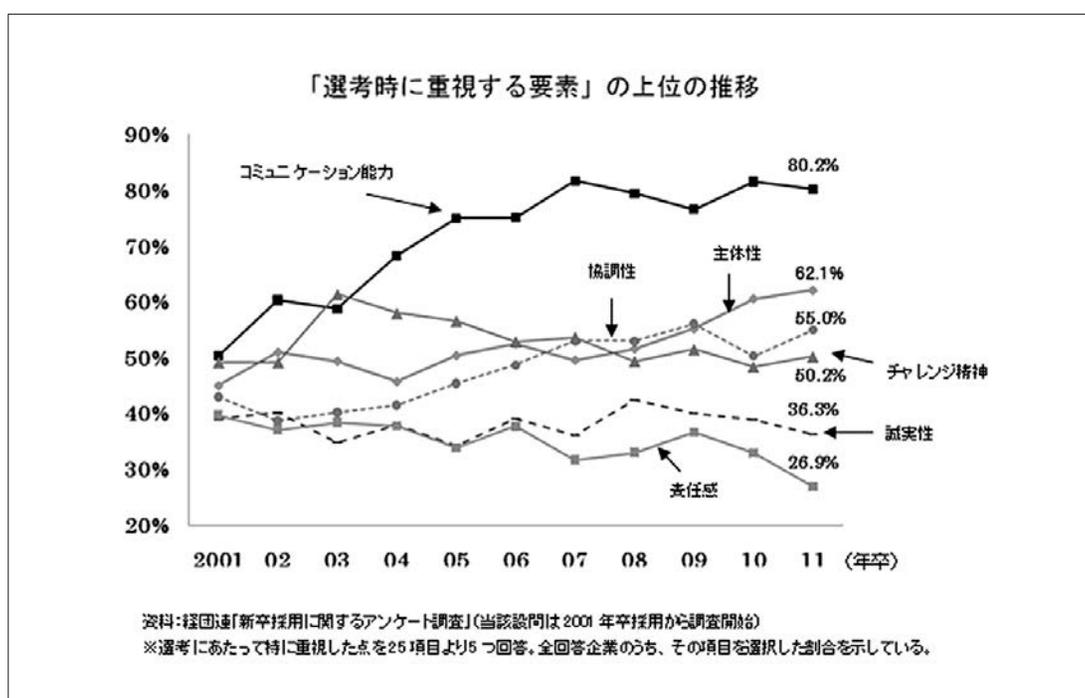
編集部は、この本がなるべく多くの方に活用されることを願っております。したがって、本のページをコピーして職場で話し合ったり、同僚に手渡ししたりすることは構いません。ただし、講演や発表などに用いる場合は、編集部までご一報ください。(連絡先は奥付に記載してあります)

これからの社会に求められる人材とは？

変化の激しい時代を生きていくためには、どのような資質・能力が必要なのでしょう。

それを考えるための一つの指標として、(社)日本経済団体連合会が加盟各社に対して行った「新卒採用(2011年3月卒業者)に関するアンケート調査」の結果をご紹介します。

企業が選考にあたって重視した点を25項目から5つ回答する設問では、「コミュニケーション能力」が8年連続で第1位となり、2位以下の「主体性」「協調性」「チャレンジ精神」「誠実性」の上位5位までの項目も、2010年3月卒採用の場合と同様の順位でした。



新卒採用(2011年3月卒業者)に関するアンケート調査結果の概要(2011年9月28日、(社)日本経済団体連合会)
<http://www.keidanren.or.jp/japanese/policy/2011/091.html> より引用

なお、OECD(経済協力開発機構)が知識基盤社会に必要な能力として定義したキー・コンピテンシー(主要能力)の3つのカテゴリーは、以下のようになっています。

- ① 社会・文化的、技術的ツールを相互作用的に活用する能力(個人と社会との相互関係)
- ② 多様な社会グループにおける人間関係形成能力(自己と他者との相互関係)
- ③ 自律的に行動する能力(個人の自律性と主体性)

経団連の調査と重なる部分が多いと思うのですが、いかがお考えになりますか？

第1章

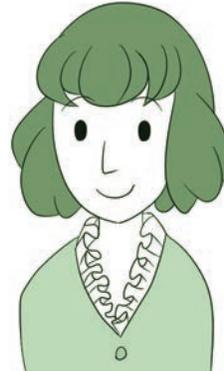
ライフステージに応じて求められる
マネジメント能力を身に付けるために

第一章

教師生活を振り返ってみよう

～これまでの経験をこれからに生かす～

毎日が忙し過ぎて、若い頃のことを振り返ることなど、あまりないよね。



若い頃の実践が出てきたの。読み返してみたら、いろいろ考えさせられたわ。

1. 教師としての自分を振り返ってみましょう。

初任者と呼ばれたころのあなたは、どんなことをしていましたか？

おそらく、学級づくりに燃えていたことでしょう。にもかかわらず、子どもたちとの関係づくりがうまくいなくて、悩んだことがあったかもしれません。

また、授業の楽しさが少しずつわかってきて、教材研究やプリントづくり、掲示物の工夫に夢中になっていたかもしれません。子どもたちから返ってくる反応が嬉しくて、夜、気がついたら職員室に自分一人だったなどという経験をおもちの方もいらっしゃるのではないのでしょうか。

「ベテラン」と呼ばれるようになった今、改めて自分の教師としての成長を振り返ってみてはいかがでしょうか。きっと、新しいエネルギーが湧き出してくることでしょう。同時に、若い人たちの成長や悩みにも思いが至ってくるのではないのでしょうか。さらに、学校の中心となって様々な活動に取り組む上での課題が見えてきたり、今後の方向性についての見通しがもてたりもするのではないのでしょうか。

2. 「経験」のもつ意味を考えましょう。

まず、自分たちがこれまでに積み重ねてきた「経験」にはどんな意味があるのかを考えてみましょう。

第一に、何と言っても日々の教育活動を円滑に進めるための知恵がその中に詰まっています。学校という組織が有機的に働いて、子どもたちが安全に、そして安心して授業を受けたり、いろいろな活動に取り組んだりすることができるためには、継続性のある、しかも安定した教育活動が行わ

れなければなりません。そういうシステムを作ってきて、そしてそれを維持して運営していく上で、「経験」は何よりの財産であると言えます。

第二には、個人のレベルでの「経験値」のもつ価値があげられます。どのような職業であれ組織であっても、その中で積み重ねられてきた職務の中での経験は、新たな場面に出合ったとき、とりわけ困難な問題に立ち向かわなければならないような状況でこそ、判断したり何かを決定したりする際の基準として機能します。経験の少ない人では対応できない場面や状況でこそ、ベテランの「経験」が生かされます。

しかし、時には「経験に頼って失敗する」ということも起きかねないことは、多くの先生方が、それこそ「経験」していることだと思います。これからの教職生活に経験を生かしていくためには、経験だけに頼ることの危うさについても自戒の念を持ち続けることが必要でしょう。

3. これからに生かせることは何でしょう。

今までの教職生活を振り返ってみると、

「結構いい実践をしてきていたのに、最近は忙しさの中でやらなくなってしまったなあ」

そんな気づきもあるのではないのでしょうか。

「失敗から学んできたはずなのに、このままでは同じ過ちを繰り返しかねないぞ」

そんな思いをもたれるかもしれません。

時代の急速な変化の中で、経験がそのまま役に立つとはいえないかもしれません。しかし、これからに生かせることは無数にあるはずです。忙しい毎日だからこそ、時には立ち止まり、今までの経験を振り返ってみることが大切なのだと思います。経験は、ベテラン教師の武器であり、宝物であるとも言えるのではないのでしょうか。

●● 現職教師の声

学校現場の忙しさは、最近になってのことではありません。初任のころからずっと「忙しい」を口癖に仕事をしてきたように思います。しかし、そんな忙しさを感じながらも、子どもとの交換日記（日記指導）が自分を支えてくれました。どんなに夜遅くなくても日記を読むこと、それに返事を書くことが苦になることはありませんでした。

日記でもいいし、ノートに書かれた授業感想でもいい。その子が胸に秘めた思いにふれるとき、明日の授業への元気がもらえます。学年での打ち合わせのうちのほんの10分、子どもが書いたものを読み合い、忙しさを忘れたと思います。子どもについて語り合うときが一番楽しい時間であることを忘れてはいけなし、若い先生方に伝えなければいけないように思います。

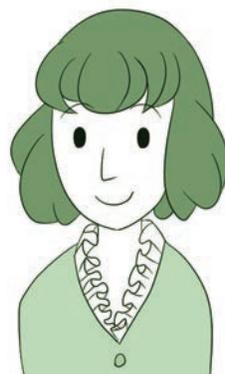
（50代男性・小学校）

第一章

学校マネジメントを常に意識しよう

～連帯感や活力のある学校をつくる～

最近、学校のチーム力を高めることが役割なのかなと思っっているよ。



学校の中で、私たちはどんな役割を果たしたらいいのかな。

1. よい学校をつくるために

「よい学校を作るためにもっとも大切なことは？」

と問われたら、何と答えますか？

ベテランと呼ばれる先生方ほど、「連帯感」とか「同僚性」といった、職員間の人間関係に関する答えが多くなるのではないかと思います。なぜなら、長い教職経験の中で、その大切さを実感し続けているからです。実際、活力のある学校、研究実践に前向きに取り組んでいる学校は、職員間の人間関係が良好な場合が多いようです。

では、職員間の連帯感や同僚性を高めていくにはどうするか。いくつかの方法はあるでしょうが、その中の重要な一つに、ベテランの先生方が組織マネジメントを意識し、若い人たちのよさを引き出したり、中堅の人たちに仕事の仕方を伝えたりしていくことがあげられるのではないのでしょうか。

2. 学校におけるマネジメントとは

マネジメントの基本は「組織にかかわるすべての人々を生き生きとさせ、高度な成果をあげていくこと」であると言われていています。そして、そのためには、マーケティング（ニーズをとらえること）とイノベーション（ニーズに応えるために改善していくこと）が大切だと言われます。これを学校という組織において考えると、

- ① 学校にかかわる人たち（児童生徒・保護者・教職員・地域住民など）のニーズをとらえること。
- ② ニーズに基づいて学校改善を行い、学校教育目標を実現していくこと。

というようにとらえられると思います。

特にベテランの先生方には、学校が今、求められている課題を把握するとともに、豊富な経験を生かして、それへの改善策を提言することが求められています。また、若い先生方の悩みやニーズをとらえ、自分の経験なども語りながら、彼らにアドバイスしたり、具体的な仕事の仕方を示したりすることも求められていると思います。

ただ、ここで気をつけておかなければならないのは、時代が大きく移り変わっているということです。学校教育に求められるものも変化しておりますし、子どもたちや保護者の意識も変わってきています。したがって、若い頃に自分が行った方法がそのまま通用するとは限りません。経験は貴重な財産ではありますが、それを生かすためには、教師が常に時代の変化に敏感であることが求められます。

そういう意味でも、マーケティングを意識することはとても大切です。持っている情報が多いほど、経験は生かしやすくなるからです。

3. 自他を生かす

「人は最大の資産である。」とは、ドラッカーの本の中にある言葉です。企業でさえそうであるなら、人間を育てる組織である学校にとって、間違いなく人こそが最大の資産と言えるでしょう。

若いエネルギーも経験豊かなベテランの知恵も、共に学校のもつ重要な資産です。それらをどう生かしていくか、そんな観点から日常を振り返ってみるのも、時には大切なことだと思います。

●● 現職教師の声

教職員をグループに分けて討議した学校内自己評価で、多くのグループから「共有」という言葉が出されました。本年度、連帯感や活力と言うことから見ると少々散漫な感がぬぐえなかった本校教職員も「共有したい」という思いは同じだったのだと、来年度への希望につなげることができました。

「こんな学校にしよう」「こんな子どもたちを育てよう」「こんな教職員チームをつくらう」

そのために、何を共有すればいいのか。時間の共有、情報の共有、空間の共有、成果の共有、喜び、笑顔、迷い、落胆…。みんなに聞いてみたくなりました。

ただ、気をつけなくてはいけないと思うことは、共有することともたれ合うことは違うということです。ある程度の経験を積んだ教師は、共有した先にある解決策を見だし、先に進める力を発揮していくべきだし、自分もそうしていきたいと思いました。

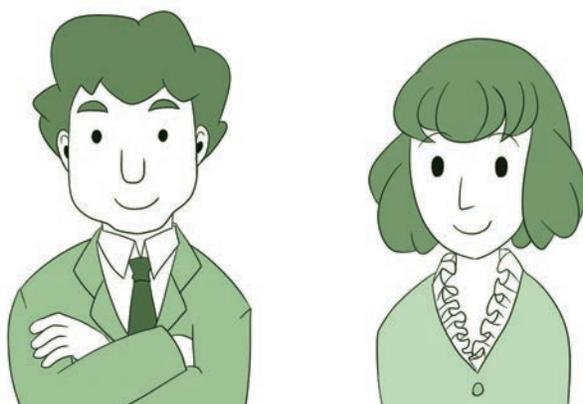
(50代女性・小学校)

第一章

創造的なリーダーになろう

～「なべぶた」型組織におけるリーダーの役割～

チャレンジ要素のない仕事には、意欲がわかない。おぼ。



今までのやり方に、マンネリ化を感じているの。

1. リーダーの大切さ

一般企業の組織のあり方をピラミッドに例えるなら、学校の組織は「なべぶた」に例えることができるでしょう。上下関係が比較的緩く、指示や命令より、横のつながりによって仕事が進められることの多い組織だからです。

こうした組織においては、少数の人間が意思決定して他の人はそれに従うというトップダウン的な仕組みはあまり機能せず、たくさんの人々が自由な議論の中で知恵を出し合う、ボトムアップ的な仕組みが有効であると言われています。しかし、その議論が単なるおしゃべりになってしまったり、いわゆる小田原評定になってしまったりしたら、時間の無駄ということになってしまいます。そうならないためには、リーダーを任せられた人が上手にリーダーシップを発揮し、議論の方向性を指し示したり、議論の結果に基づく実践がバラバラにならないように束ねたりしていく必要があります。

2. 創造的なリーダーになる

何らかの方針を決定するとき、一番の早道は前例を踏襲するということでしょう。しかし、このように変化の激しい時代にあっては、それは時として、メンバーを誤った方向に導いてしまう場合もあります。前例踏襲の問題点を挙げてみます。

- ① 学校のあり方や教育の内容などについての、時代の変化が反映されにくい。
- ② 子どもたちや保護者のニーズ、教職員の資質等が活かされにくい。

③ 同じことの繰り返しは、教職員のモチベーションを低くしてしまう恐れがある。

こうした問題点を克服するためには、組織のメンバーが常に時代の変化や学校の状況を正確にとらえ、それを踏まえて、最適な方法を考えたり話し合ったりしていくことが求められます。もちろん、前例を参考にすることは多いと思いますが、その場合でも前例をそのまま踏襲するのではなく、状況に応じて変化させていくことが大切です。そして、メンバーにそのような意識をもたせたり、新しい方法にチャレンジする楽しさを伝えたりしていくことは、リーダーの大切な役割の一つです。だからこそ、リーダーには、他のメンバー以上に創造的であることが求められるのです。

3. 「成功か失敗か」という尺度だけでとらえない

「新しいことにチャレンジしたが、うまくいかなかった」ということはしばしばあることだと思います。そうしたとき、それを「失敗」というふうにとらえてしまうと、メンバーの思考が後ろ向きになり、前例踏襲型に戻ってしまいがちです。

まずはうまくいかなかったのはどんなところか、それはなぜなのかをきちんと話し合い、それを「改善への材料が得られた」というように考えていくことが大切だと思います。そうすることで、次への一歩が見えてきます。

これとは逆に期待通りの成果があがった場合には、その成果を皆で確認し合ったり互いの労を讃え合ったりすることにより、メンバー一人一人に「新しいことにチャレンジしてよかった」という気持ちを実感させることが大切だと思います。それが、次の創造を生み出していく原動力となります。

●●● 現職教師の声

リーダーになった時、担当の職員にどのように仕事を振ればよいかかわからず、いつも昨年度の資料を参考にして前例を踏襲していました。児童指導部の挨拶運動のリーダーになり、昨年度同様に担当を割り振って見たものの、職員の前向きな気持ちが生まれず活動が停滞してしまいました。

そこで、挨拶運動担当の職員一人一人に別の役割を用意し、子どもの思いを代表委員会で話し合ってもらったり、他の学校の活動例を紹介してもらったりするなど、若い先生やベテランの先生の考えを寄せ集めて、気持ちのこもった挨拶運動を展開できるように工夫しました。それぞれの考えをもった担当が自分の思いをもって挨拶運動の形を作り上げていくことで、担当職員の前向きな気持ちが育ってきます。すると、新しい発想が生まれて実行に移し、成功すると次の意欲が生まれるという、よい雰囲気広がっていきました。世代も資質も違う職員の経験から生まれる知恵と新しい発想が混ざり合い、リーダー一人では生み出せない創造的な活動ができる組織になるということがわかりました。

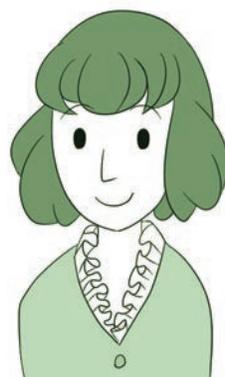
(30代女性・小学校)

第一章

時代の変化、子どもの変化に敏感になろう

～経験頼みは両刃の剣～

今は学級の人数が少なくなってきたけど、でも、今の方が大変だなと感じているよ。



昔は一クラスに四十人以上の子どもがいたこともあったぞつね。

1. 昔はうまくいったのだけれど…

皆さんはたくさんの経験をお持ちでしょうから、その中からうまくいった例などを選んで、学級経営や授業に用いることも多いことでしょう。しかし、こんなことを感じたことはないでしょうか。

「昔はこれでうまくいったのだけれど、どうしてこの子たちには通じないのかしら。」

こういった思いは、多かれ少なかれ、ベテランと呼ばれる世代の先生方に共通したものではないかと思えます。子どもの本質が変わったかどうかの議論はさておくとして、教師（大人）に対する見方や、指導への反応の仕方などは、明らかに変わってきています。

この時、「昔はこれでうまくいったのだから、うまくいかないのはこの子たちに問題がある」と考えるか、「目の前の子どもたちの現状に合わせて、自分の指導のあり方を変えていこう」と考えるかが、今後の学級経営や授業を左右する分岐点となります。

子どものせいにしても何一つ解決せず、かえって子どもたちとの距離が離れていくばかりです。これでは、経験がかえってマイナス要因として働いてしまいます。

うまくいかないと感じたときは、自分の指導を振り返ってみることが大切だと思います。

2. 子どもたちを知る

「子どもたちの現状に合わせて指導を変える」と言っても、何もかも新しくするというものではありません。経験に支えられた実践には、時代を超えた価値があります。それを基にしながらかも、子どもたちの現状に合わせ、実践のあり方や子どもへの対応の仕方などを少しずつアレンジしていく

ということです。

そのためにはまず、子どもたちを知ることが大切です。

ある先生は、こんなことを語っていらっしゃいます。

「できるだけ、子どもたちがよく見るテレビ番組やコミックを見るようにしています。それもなるべく、『教育的にどうか』などと言う先入観を持たないようにしてね。そうすると子どもたちの思考回路のようなものが見えやすくなるし、第一、子どもたちと話が合うようになってきます。」

また、ある先生は、

「子どもたちと個別に話す時間を大切にしています。教室に少し早く行くと子どもたちは昨日のことなどをいろいろ話してくれます。また、ちょっと気にかかる様子を見せた子がいる場合、なるべく二人で話すように心がけています。」

と語っていただきました。

3. 経験の賜物

子どもの声にいていねいに耳を傾ける先生の多くが、「子どもたちの起こす問題行動の陰には、必ずと言っていいほど大人の問題や社会の問題がある」と言います。ここには、「昔はこれでうまくいったのだから、うまくいかないのはこの子たちに問題がある」というような、子どもを責める視線はありません。むしろ、そういう子を生み出してしまう環境に目を向け、そこからどのように子どもたちを守っていくかを探っていらっしゃいます。

こうした温かい児童生徒理解ができるということもまた、経験の賜物であろうと思うのです。

●● 現職教師の声

確かに昔は、うまくいったことが今はうまくいかないと感じることがあります。子どもが変わったからと考える前に、自分の感覚が子どもと離れてしまったのではないかと自信をなくしてしまうこともたびたびです。情報化時代に生まれ育った子どもたちには、多様な指導法が必要です。情報分野での私自身のスキルを高めながら、子どもの興味関心のもてる教材教具を準備し、指導法を見直していかなければならないと思います。落ち込んでばかりいるのではなく、自分の方から子どもに寄り添う努力を重ねていきたいと思いました。

児童理解や児童指導においては、経験が功を奏することもあります。チームで指導法を検証していくことも必要です。子どもの言動にしっかりと目を向け、心の声に耳を傾ける努力は必ず子どもとの信頼関係につながると思いました。

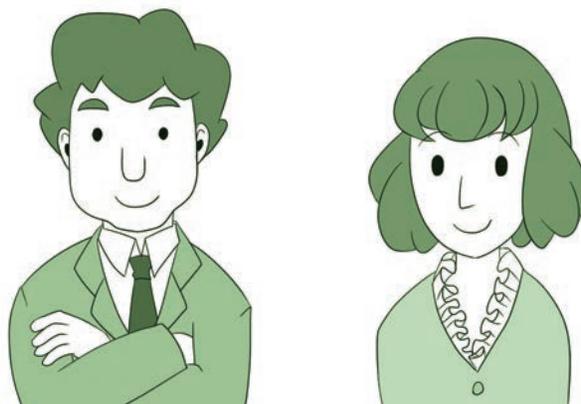
(50代女性・小学校)

第一章

自分の教育実践を伝えていこう

～技術だけでなく、思いも伝える～

ベテランの先生の授業を参観して、技術を盗むことも減ったかな。



昔は、先輩に板書や発問などの基本的な指導技術を教わったわね。

1. 指導技術の伝承

ここ数年の大量採用の結果、若手教師が増加し、その育成が急務となっています。日本の教師の力量は、研修のみならず、授業研究などによって高められ、世界的にも質が高いと言われてきました。しかしながら、多忙化が進み、教師同士のコミュニケーションや授業の質を高め合う機会が減っているようです。その結果、発問、板書、ノート指導といった基本的な指導技術がベテラン教師から若手教師に伝わりにくくなり、学校全体の授業力向上が課題となっています。

自らの授業実践力を高めるだけでなく、指導技術の伝承もベテラン教師の役割として求められているのです。

2. 指導技術の背後にある考え方や思い

よい授業は、多様な指導技術の組み合わせによって支えられています。指導技術は、自然に身に付くものではありません。日々の授業実践を振り返りながら、磨いていくものです。他の教師の優れた指導を見て、すぐにまねできるものでもありません。自分の授業に取り入れて、試行錯誤を繰り返しながら、自分なりの指導技術を身に付け、高めていくことが必要です。

身に付けた指導技術は、教育に対する考え方や子どもたちへの思い、願いによって具体的な指導行為となり、教育効果を生み出します。これは、教師の姿勢や子どもたちとのかかわり方にも影響します。単にスキルとして模倣するだけでは、不十分なのです。

自分の教育実践を他者に伝える場合には、指導技術の背後にある考え方や思いも含めて伝えるこ

とが重要です。

3. 実践の思いを伝える

授業をデザインする場合、目標、教材、学習者の実態、指導方法、評価方法等だけでなく、授業者の願いも大切です。授業研究の中には、授業者の願いに即したりフレクション（振り返り）を中心に行うという考え方があります。よい授業とは、一義的に決まるものではなく、教師と子どもたちの相互作用によって生み出されるものであり、授業者が自らの願いに沿って日々の授業実践を振り返りながら、授業を改善していくことこそが教師の成長であるという考え方は、ベテラン教師も、不断の努力を怠らず、よりよい授業実践を目指すことが必要です。

一方で、若手教師に指導技術を伝え、学校全体の授業力向上に寄与するという役割を果たすためには、単に自分の授業を見せるだけでなく、無意識に行っている指導の背景にある思いや願いを説明する必要があります。それはベテラン教師にとって、自らの指導を振り返り、その意図を言語化することになるので、習慣化した行為や思い込みを見直すきっかけになるかもしれません。

授業研究等の場だけでなく、教育実習生の指導や初任者研修等の場でも自分の教育実践について、その背景や思いも含めて伝えてみましょう。若手教師が指導技術の重要性や、それを高める必要性に気づくだけでなく、授業をより深く見ることができるようになることで、授業力の向上につながることを期待できるでしょう。

●●● 現職教師の声

基本的な指導技術について、授業研究の場で指摘することは少なく、教育実習や初任研等で指導する時に触れることが多い。しかし、技術だけを取り上げて指導しても、それが授業全体の中で生かされるようになるまでには時間がかかり、指導の難しさを感じていた。自分自身の授業においても、指導技術については経験に頼っており、振り返ることもしなかった。自らの願いや思いに立ち返って授業を振り返り、日常の授業の中で意識していない言動の意図を他者に伝えることは、難しいかもしれないが授業を見直すよいきっかけになるだろう。同時に、若手教師にそれを伝えることで、指導技術の意義や意味の理解につながる可能性もあるだろう。

我々が先輩教師から学んできた日本の授業技術は、たとえ授業のあり方が変わったとしても、生かす場面があるに違いない。世代交代が進む今だからこそ、自分の授業実践を語っていきたい。

(40代男性・小学校)

第一章

失敗体験を語っていこう

～それがコミュニケーションにつながる～

それを若い人たちに
語っていくことも、大切
かもしれないね。



今までの実践を振
り返してみると、失
敗した授業の方が心
に残っているわ。

1. 先輩教師の教職経験を聞くことの楽しさ

あるベテラン教師から伺った話です。

「若手教師の頃に、夏休みの日直当番で勤務していると、先輩教師たちから『昔話』のように教育実践話を伺う機会がありました。ゆったりとした時間の中で話される先輩教師の昔語りは、教育実践の奥深さや授業を創ることのおもしろさを満喫させてくれるものでした。そして、その『昔話』には、必ず先輩教師の失敗談も入っていました。雲の上のような先輩教師がぐっと身近になり、親しみを抱く存在となったことを覚えています。」

若手教師にとっては、豊かな教職経験のある教師による奥深い教育実践話はもちろんのこと、失敗談もまた魅力のある話なのです。

2. 失敗談は、教師としての幅を広げる

ベテラン教師の大量退職の時期を迎えた今、教育人材の育成という観点から整理すると、学校経営には次のような課題があるといわれています。

- ① 指導技術や教育実践哲学の伝承
- ② 学校としてのチーム力－教師集団の同僚性－の育成

失敗談を語ることは、この両者によい効果をもたらすように思います。

ベテランとなった今、自分の教育実践を振り返ってみると、うまくいったという思い出より、「あそこは、こうすれば良かった」という反省の方が多いというのが実感ではないでしょうか。それを伝

えていくことで、

「日々の教育実践に省察を加え改善を図っていく、このことの繰り返しが教師の資質と能力を高めていくのだ」

ということを伝えることができますと思います。

また、そうした先輩教師の若い頃の失敗談は、若手教師に安心と勇気を与え、学校というチームの同僚性や活力を高めていくことにもつながっていくでしょう。

3. 聞き手の琴線にふれる失敗談を語る

これも、あるベテラン教師から伺った話です。

「小学校1年生の算数で、10のまとまりに分けると考えやすいという、十進法の活用を考えさせる授業でした。なるべく身近なものを使った方がわかりやすいし楽しいだろうと考え、4階建ての校舎内にある水道の蛇口を教材として使うことにしました。そこで、子どもたちに実際に調べに行かせた後、教室の床に蛇口絵カードを並べさせたのです。蛇口は全部で87個ありましたので、絵カードも87枚あります。それを、10枚のかたまり8つとあと7枚というふうにして数えさせたいと思ったのです。ところが、子どもたちは、校舎の階毎に蛇口絵カードを並べたのでした。そして、端から順番に数え始めたのです。子どもたちは、今、実際に活動してきた数え方を繰り返すことが一番わかりやすいのだと考えたわけです。どうやっても本時のねらいを実現できそうにありませんでした。」

この話は、初めに教材ありきではなく、「付けたい力」をしっかり押さえた上で教材選びをするべきであること、学習活動の楽しさだけを考えないことなど、教材研究の大切さを伝えてくれます。

できれば、単なる失敗談に終わらせず、そこから何を学んだのかについても語っていくと、若手教師にとって、よい参考となるでしょう。

●●● 現職教師の声

教師になったばかりの頃、「いい先生」になりたくて、子どもたちとのふれ合いを大切にしていました。子どもたちの思いを尊重し、実現させようと励んでいました。なのに、学級の雰囲気は悪くなるばかりです。子どもたちの声を大切にしているのにどうしてだろう？と悩みました。子どもたちの思いを大切にしているつもりが子どもの声に振りまされ、いつの間にか「いい先生」から「都合のいい先生」になっていたのです。そのことに気づかせてくれたのは先輩教師です。

放課後の職員室での雑談のような話が、授業づくりや子どもの見取り、学級経営など、私の教師人生の土台をつくってくれたと思っています。明日の準備も大切ですが、放課後の職員室でお茶を飲みながら、今日の学級の様子を話すことも大切だと気づかされました。

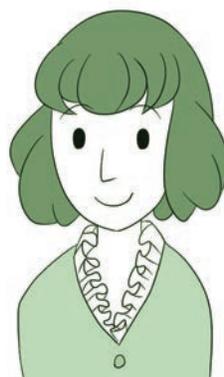
(40代女性・小学校)

第一章

ICT の活用に積極的に取り組んでみよう

～経験知がプラスされることで、ICT 活用の効果がアップする～

私は積極的に取り入れるようにしています。子どもたちも喜んでくれるからね。



次々に新しい機械が導入されるけど、とてもついていけないわ。

1. 新しい教育方法・学習内容への対応

ここ数年の間に、コンピュータ、大型ディスプレイ、実物投影機、電子黒板などの情報機器が多くの教室に設置されました。学習指導要領の総則においても、「指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項」に、

「各教科等の指導に当たっては、児童がコンピュータや情報通信ネットワークなどの情報手段に慣れ親しみ、コンピュータで文字を入力するなどの基本的な操作や情報モラルを身に付け、適切に活用できるようにするための学習活動を充実するとともに、これらの情報手段に加え視聴覚教材や教育機器などの教材・教具の適切な活用を図ること」

と書かれています。授業での ICT（情報通信技術：Information and Communication Technology）活用は、若手、ベテランを問わず、すべての教師に求められていますが、日本では各教科での活用率は低く、課題となっています。また、基本的な操作や情報モラルの指導などへの対応も充分ではありません。

2. ICT 活用のためのスキル・知識

コンピュータ等の ICT 機器の活用や基本的な操作の指導に関しては、教師が操作に自信がないことが課題となっています。

ICT 活用に関しては、若手教師の操作スキルは相対的に高く、活用することへの抵抗感は低いと言われています。しかしながら、ICT 機器の操作スキルは高くても指導スキルが伴っていなければ、

効果的な活用にはなりません。ICT が本当に有効に働くためには、当然のことながら、学習内容や教材に関する理解が不可欠です。

若手教師が ICT 機器を活用した授業をベテラン教師が参観すると、最初こそ「私にはうまく使えない」と思うかもしれません。しかしながら次第に、

「教科書のこの写真を拡大提示して説明するとわかりやすいのに…」

「コンテンツの提示だけでなく、板書も組み合わせた方がより効果的なのでは？」

などと思いはじめるとは思いませんか。

3. 経験は生かされる

ベテラン教師が効果的な活用を直感的にイメージできる ICT 機器の代表は、実物投影機です。接続も操作も簡単で、教科書やノート、子どもの作品など、実物を写すだけなので、準備の手間もかかりません。ICT が不得手だと思われる先生は、まずこのあたりから取り組まれてはいかがでしょうか。抵抗感を乗り越え、最初の一步を踏み出してしまえば、ICT 機器を効果的に活用できるようになる時間は、若手教師よりも圧倒的に短くて済みますし、これまでの経験を生かすことで活用の幅もぐんと広がっていきます。

教育の情報化の手引(文部科学省)には、「ICT そのものが児童生徒の学力を向上させるのではなく、ICT 活用が教員の指導力に組み込まれることによって児童生徒の学力向上につながる」と書かれています。ベテラン教師の指導力に ICT 活用が加わることによる効果が期待されているのです。若手教師の授業から学び、そこに経験知をプラスすることによって、さらに授業の力量を高めることができるでしょう。

●● 現職教師の声

若手教師による教科指導での ICT 活用を参観して、私にはできないと感じることが多く、できる限り避けるようにしてきました。避けるだけでなく、そうした新しい教育方法を否定的に捉えていたかもしれません。しかし一方で、そうした授業での子どもたちの生き生きとした姿や目の輝きを見て、挑戦したい気持ちもありました。

教室に大型テレビと実物投影機が設置されたのをきっかけに、同学年の若手教師に配線と簡単な操作方を教えてもらい、恐る恐る授業で子どもたちの作品を提示してみました。最初はピンと合わなかったり、画面が暗かったりと、操作に手こずりましたが、子どもたちの集中力を高めたり、意欲的な発言を引き出したりできる効果を実感しました。

今では、時々若手教師に教えてもらいながら、ほぼ毎日のように活用し、授業になくってはならないものになっています。最近では、電子黒板の活用にも取り組んでいます。

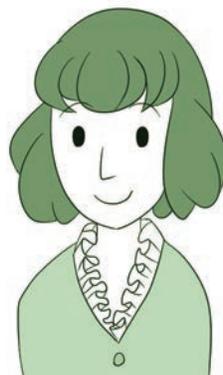
(50代女性・小学校)

第一章

若い人たちの相談に乗ろう

～自分もかつて通ってきた道～

その場で、若手教師の相談に乗ること、いいと思うよ。だけど、他にも手だてがありそうだね。



最近、若手の教師が多くなってきましたね。その場、その場の指導はしているのだけでも…。

1. 「若手教師」はつらいよ？

このところ、若手教師が療養休暇に入ったり、採用後わずかな期間で退職してしまったりするケースが増えているようです。過度なストレスにより不祥事を起こすなどのこともあり、それらの対応が喫緊の課題となっています。このため、それぞれの学校では、様々な工夫を凝らし未然防止に対処しているところです。

また、ベテラン教師の大量退職の時期を迎え、各学校では、若手教師の数が大幅に増えてきており、その育成が大きな課題となっています。管理職の研修会では、若手教師の保護者への対応や苦情への対応を心配する声が多数聞かれます。一方、若手教師の研修会では、教師の指示を聞かない子どもへの対応や保護者への対応に苦慮しているという声が数多く聞かれます。

2. 「若手教師」の困り感の実際

こんな話を聞いたことがあります。

放課後、特別支援教育に精通したベテラン教師のところに若手のA教諭が相談に来ました。どうやらA教諭は、教師の指示を聞かないBさんの扱いに困り果てているようです。ベテラン教師はA教諭の涙ながらの訴えを最後までじっと聴いておりましたが、やがて口を開き、明日に向けた処方箋を2つほど示しました。A教諭は、話を聞いてもらったことでやや落ち着きを取り戻したようでした。

翌日以降、ベテラン教師は、担当授業がない時間にA教諭の教室に入りました。そこで気づいた

ことをさっと伝えたときもありましたが、長い話をする場合には放課後を使うことが多かったようです。そのようなかわりが2週間程度続きましたが、その後A教諭は、気兼ねなく日常的にベテラン教師に相談をするようになりました。

このような話は、どこの学校にもあると思います。若手教師の中には、自らの限界に近い所まで悩みを抱え込みながらも相談できずにいる場合があります。また、特定の子どもの対応に追われ、学級集団に規律と秩序がつかれず、いわゆる「学級崩壊」の兆しがみえる場合もあります。

若手教師の数が増えてきたことに伴い、学校運営にあたっては、現職の教師を教育したり支援したりする「しくみ」をつくっておくべきではないかと思います。

3. 「ハード」と「ソフト」の両面で整理して

まずはハード面として、学校運営組織の中に相談できる「しくみ」を作ることが大切です。例えば学年会議のあり方ですが、時間を十分に保障して、自由に問題点を話し合ったり、先輩に相談したりする時間を確保するのです。学級担任・教科担任としての所属は、基本的には学年団ですから、学年会議の時間こそが若手教師育成の最前線ともいえるでしょう。学年のリーダーでもあるベテラン教師には、この場での活躍をお願いしたいと思います。また、学校によっては、ベテラン教師の役割に「相談支援者」であることを位置づけておくこともよいと思われます。

次にソフト面としては、やはり、相談しやすい職場を作っていくということです。職員室の中で、ちょっとした時間に、気になる子どもや授業内容が口に出せるような職場づくりが求められます。そのためには、ベテラン教師が率先して若い先生方に声かけをしていくことが出発点であると思います。

●●● 現職教師の声

若手教師であっても、結構プライドが高く、自説にこだわる人もいます。特に臨時的任用職員経験のある若手教師の中には、基本的なことが身に付いているとは思えないにもかかわらず、わかっているような気になっている人もいます。その結果、トラブル対応が十分でないために問題をこじらせてしまい、後手に回るケースもありました。

このようにときには、まず話を聞いてあげること、またそういう雰囲気をつくることに努めました。こんなことはわかっているだろうとの先入観をもたずに丁寧に接することを心がけてきました。

また、日頃から教師としての戸惑いや不安が言えるような学年団づくりに努めました。学年会議ではもとより、ちょっとした時間にも気軽に「○○さんは、最近どうですか？」と声かけをしています。

(50代女性・小学校)

第一章

報・連・相を大切にしよう

～「慣れ」は味方であると同時に敵でもある～

どうして、そうなるのかを立ち止まって考えみる必要があるそうだね。長い経験に頼り切った判断は、時に心配だね。



報告・連絡・相談、いずれも大切なことだね。でも、そのことが十分でないことでの失敗もあるわ。

1. 「報・連・相」はむずかしい？

「報告・連絡・相談については、繰り返し研修の視点にあげられますね」

「報告・連絡・相談の大切さや必要性はわかっているのだけれども、対応に不十分なところがあってトラブルとなった事案があるということですよね」

校内で起きた怪我の保護者への報告、いじめを訴える子どもや保護者への対応、地域の方からの苦情対応などに万全を期して対処したと思ったつもりでも、何かしらの齟齬をきたすのは、どこかに配慮に欠けたことがあったと捉えるべきでしょう。関係者への報告という一例をとっても、やさしいことのように、結構、難しいことであるとの認識に立ちたいものです。

これまでの多様な教職経験を踏まえて、その難しさに対処するためのいくつかの指針を見つけ出したいものです。

2. 事例の「振り返り」からみえてくるもの

教師という仕事は日常的に、その場その場で適切に判断し、対処していくことが求められる職種であるといってもよいでしょう。そして、その場の判断とは、様々なことを視野に入れて対応を考えるだけでなく、指示したり説明したり報告したりすることまでを含んでいると考えるべきでしょう。その際に、これまでの経験から似たようなケースがあればそこから類推して判断ができますし、また、失敗体験からは、そうならないような判断を導きだすことができます。長い教職経験は、教師としての必要な資質と能力をはぐくんできたといってもよいかと思います。

しかし、事後対応が必要となった多くの事例を見てみますと、その場の対応のまずさだけでなく、この件は終了済みであると考えて上司や同僚に報告・連絡・相談を疎かにしてしまった結果、必要な対処が足りなかったことによるものが結構多いようです。

3. 「基本」に立ち返ることから

このことは、教職経験の長いベテラン教員の“落とし穴”でもあります。自戒の念をもちつつ心がけたいことを整理すると、次のようになりそうです。

- ① 判断結果についてメタ認知する意識をもち、立ち止まって事案の広がりを考えてみること。
自分にとって都合の良いように考えない。
- ② 「学校は、組織として対応する」ということをないがしろにしない。少しでも気になる判断は、上司や同僚教師の意見を伺う。

ベテラン教師は、様々な事案の対処から学んできたたくさんの教訓とともに、それらを集約、集積して「基本」としてまとめたものを自らの内にもっています。当然のことながら、「報・連・相」の励行もその中に含まれます。その「基本」に立ち返ることが時折求められるのではないのでしょうか。そして、「基本」を意識した判断こそが、より適切な判断や対応を生むことになるのだと思います。

また、豊かな教職経験を持っているベテラン教師が、それによりかからずに「基本」を大事にしようとするその姿は、後輩教師にとってよきモデルとなります。とりわけ、若手教師にとって、ベテラン教師の行動は、ものごとを判断する場面でのきわめて実践的な学習材料となるにちがいありません。ベテラン教師の皆さんの日頃の動きが学校をつくっているともいえるのです。

●●● 現職教師の声

「体育の学習で、Aさんが転んで尻餅をついた。大きな訴えもなかったし首から下のことなので、『この程度なら大丈夫であろう』と判断して何も対応せずに帰宅させた。けれども、帰宅後、Aさんは痛みを訴え、近くの病院で診察を受けることになった。診察の結果、尾底骨骨折であった。」

このような報告が学校の中では日常的にあります。このときの事例を振り返ってみると、教師の「この程度なら大丈夫であろう」という判断から始まっています。子どもの中には、「痛い」という訴えができず帰宅する子もいますから、この場合、その後の対応として、「Aさん、体育のときに尻餅をついたけれども、だいじょうぶですか？」という、保護者にフォローする言葉かけをするべきだったと思います。

学校では、情報を共有し相互啓発するために事故報告をします。単にこんなことがありましたにとどめずに、具体的な対応の仕方や、心配なことがあるとしたら何なのかまでを付け加えたいと思いました。

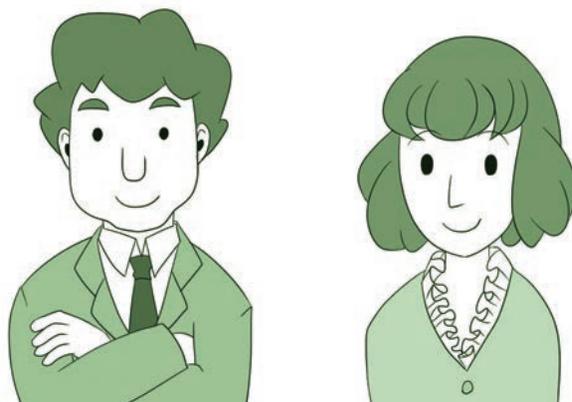
(40代男性・小学校)

第一章

地域に信頼される学校をつくろう

～子どもは学校だけでは育てられない～

地域の方に出会うこと、そして、いろいろな話をするところからかな。互恵の気持ちをもてるようになっていいね。



保護者はわかるのだけれど、地域となると多様なので、どんなことがあげられるの？

1. たかが「缶コーヒー」、されど「缶コーヒー」

あるベテラン教師の机上に日付が入った一本の「缶コーヒー」が何気なく置いてありました。そこで、その「缶コーヒー」のことを訊ねてみました。すると、こんな話をしてくれました。

「この『缶コーヒー』には、『小さな物語』があるんですよ。

私は、朝の登校パトロールを日課としていました。数年前の3月に、いつものように朝の登校パトロールに出かけました。すると、その場所に地域の方も登校パトロールに出てきてくださっていました。とっても寒い朝だったので、『先生もおひとつどうぞ』とくださった、その方からのいただきものなのです。

その方の気持ちがとても嬉しくてね。飲まずに日付を入れて、自分の勲章として、励みとして飾っておいたのです。」

ベテラン教師と呼ばれるようになると、上記のような『小さな物語—地域編—』がいくつかあるのではないかと思います。その物語の中身は、きっと、教師である自分自身にとって成長の礎石となった教育実践であろうと思います。

2. 地域の学校としての存在意義

ある教育学者が、公立学校には、「地域性」「平等性」「多様性」の3つの特徴があると言っております。第一の特徴である「地域性」について、「地域に根ざした学校」とか「地域とともに歩む学校」というようなキーワードを手がかりに、公立学校の、地域の中でのあるべき姿を求めていくと学校

の役割が見えてきます。少し大げさに聞こえるかもしれませんが、“学校は、その地域にあって「学び」や「子育て」の機能を担う機関として地域貢献を行っている”とも言えそうです。このように地域にある学校を位置づけると、主体的で積極的な学校存在の意義がみえてくるように思います。

3. 地域の学校として立つ

先程のベテラン教師の話をもう少し借りますと、毎朝、同じ交差点で朝の登校パトロールをしてくださった地域の方がいたそうです。その方は、不登校気味だったAさんに励ましの声をかけ、見届けてから帰宅するのを日課にしていたそうです。

どこの地域にも必ずといってよいほど、学校にとって『キーパーソン』となってくださる方がおられるようです。このような方々の学校に寄せるふくよかで温かな眼差しは、学校の教育活動にとって大きな支えです。また、時には、地域住民の目線からみた学校について厳しく真摯な意見を寄せてくれる、力強い存在でもあります。

学校を取り囲む地域を「網の目」(ネットワーク)として見てみると、『キーパーソン』(大きな結び目)となってくださる方の存在がより明確になるように思います。

地域に対し学校が働きかけていく方向は、この「網の目」(ネットワーク)を密にしていくこと、そして、一つ一つのノット(結び目)を確かなものにしていくことであると考えます。例えば、学校と学校評議員が発信者となって、地域の子ども育成団体等に呼びかけ、地域の子ども情報の共有化や役割分担を図った実践がありました。このように、これまでの既存の連携組織のあり方を見直すと、新たな視点がみえてくるように思います。

地域との信頼関係の素地づくりは、学校の存在意義を凜として示すことでもありそうです。

●● 現職教師の声

かつて勤めていた学校に、除草や立木の枝打ち作業をすると、子どもはすでに卒業してしまっているにもかかわらず、必ず参加してくださるありがたい方がいました。その方は、学校にちょっとした事故やトラブルがありますと、必ずといってよいほど学校に来てくれます。そして、事案の顛末をお伝えすると、いつも語る台詞があるのです。「学校が困っているときに助けるのが地域です」「何かお手伝いすることがありますか?」と。なんともありがたい地域の『キーパーソン』でした。お仲間も多い方でしたので、地域にお願いしたいことの相談にも快くのってくれました。

本文のような思いで地域の方々に接していると、学校の思いがつながる方と出会うことができます。そのような方々を中核にして、「ネットワーク」づくりを進めたいですね。

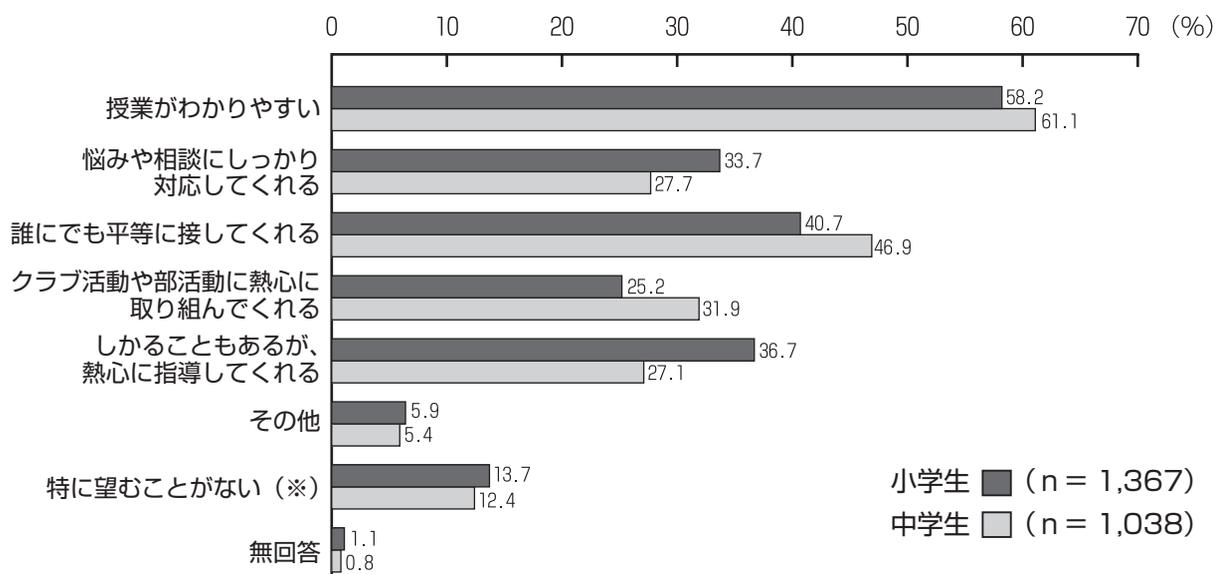
(50代男性・小学校)

子どもたちにとっての「いい先生」とは？

子どもたちにとっての「いい先生」とは、どんな先生なのでしょう。データをもとに、考えてみましょう。

横浜市教育委員会では平成19年10月、児童生徒、保護者、教員、市民の約1万人を対象として、学校教育についての設問を中心としたアンケート調査を行い、その結果を平成20年3月に公表しました。その中から、教員の指導に望むことについての児童生徒へのアンケート結果を引用させていただきます。

教員の指導に望むこと（複数回答）



（※）中学校調査では「特に何も望まない」

横浜市教育意識調査 報告書（平成20年3月、横浜市教育委員会）

<http://www.city.yokohama.lg.jp/kyoiku/toukei-chosa/pdf/h19hokoku-all.pdf> のデータを用いてグラフを作成

この調査からは、小学生・中学生ともに教師に対し、わかりやすい授業をしてほしいことを望んでいることがわかります。もちろん、それだけで「いい先生」になれるわけではありませんが、まずは授業力を磨いていくことが「いい先生」への第一歩だということは言えるのではないのでしょうか。

第2章

これからの時代に求められる
授業力を身に付けるために

第二章

これからの時代に求められる学力を育てる授業を

～時代が変われば学力観も変わるへ～



1. グローバル化した現代に求められる学力とは？

どの国にも、歴史や伝統によって育てられてきた、その国に固有の文化があります。したがって、求められる学力も当然その国に固有のものであり、このことは今後も大切にされなければならないと思います。

しかしながら、90年代に入るとグローバル化が急速に進展し、経済も文化も国境を越えて発展する時代となりました。このような時代にあって、いつまでもその国固有の文化や学力だけに固執していたのでは、その国の先行きはきわめて厳しいものとなるでしょう。その国に固有の学力を大切にする一方で、先進国においては特に、国際社会において求められている学力を育成する必要に迫られているのです。

2 国際的な学力調査に見る、日本の学力の特徴

これからの時代に求められる学力を国際的な統一基準によって測定する試みとして、OECD（経済協力開発機構）が開発したのがPISA調査です。この調査などの結果から、日本の子どもたちの学力の課題として、次のようなことが明らかになってきました。学習指導要領解説の「第1章総説1改訂の経緯」より引用します。

- ① 思考力・判断力・表現力等を問う読解力や記述式問題、知識・技能を活用する問題に課題
- ② 読解力で成績分布の分散が拡大しており、その背景には家庭での学習時間などの学習意欲、学習習慣・生活習慣に課題

③ 自分への自信の欠如や自らの将来への不安、体力の低下といった課題

こうした現状を受け、平成19年に改正された学校教育法（第30条第2項）（中学校第49条、高等学校第62条で準用）において次のような学力観が示されました。

「〔前略〕生涯にわたり学習する基盤が培われるよう、基礎的な知識及び技能を習得させるとともに、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくみ、主体的に学習に取り組む態度を養うことに、特に意を用いなければならない。」

これからは、上記の学力観に立ち、子どもたち一人一人に「生きる力」を育成していくことが求められています。

3. 授業を変える

一斉授業を基盤として発達してきた日本の学校教育は、知識や技能を習得させる面においては優れた伝統を有しており、実際、各種の学力調査においても好成績をあげております。しかしながら、今までの授業においては「先生が教えたことを子どもたちが覚える」という傾向が強かったため、自ら考える力や、考えたことを表現する力が十分には育っていないということがPISA調査の結果からも明らかになっています。また、そのこととも関連するかと思われませんが、学習意欲が諸外国に比べて低いという、残念な結果も出ています。

これからの時代に求められる学力を育成するためには、子どもたちが主体的に学習に取り組み、自分の考えをしっかりと持ち、それを友達と交流するコミュニケーションを通してお互いを高め合うような授業を作っていくことが大切です。教師が主役の授業から、子どもたちが主役の授業への転換が求められているのです。

●●● 現職教師の声

6年理科の『大地のつくり』の課題づくりでのこと。大地に対してもっている自分の考えを見つめ、図や言葉で表現させた。表現されたものを見ると、単なる想像ではなく、これまでに獲得した知識や経験などに裏打ちされた考えであることがわかる。次に、表現されたものを見合い、共通点や相違点を見つけていく。時にはグループで、最終的には全体で見合った。「地面の下には、土が移動する道が縦横無尽に広がっていて、その道を通って、川を流れる水のように、土が動くのではないかと驚くような発想をする子どもがいた。子どものこのような面白い発想があって、授業が豊かになる。どんな考えも受け入れ、自分を含めたみんなの力でクラスの課題へと高めていくことは、子どもたちの自信につながる。だからこそ、この活動には、じっくりと時間をかけ、最終的には、自分たちの力で解決すべき課題を整理していかせた。

生きる力を育むことは一朝一夕にできることではない。子どものもつ力や可能性を信じて、まずは私たちが、授業を見直し改善していくことだ。将来、国際社会に生きる子どもたちを思い描きながら、日々の実践を粘り強く続けていきたい。

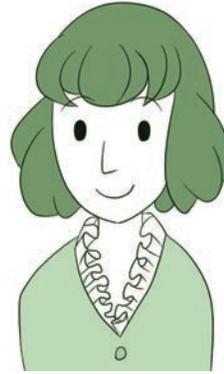
（40代女性・小学校）

第二章

付けたい力を明確にした授業を

～「初めに教材ありき」から「初めに付けたい力ありき」へ～

その前に、どんな力を付けたいのかを考えるべきではないのかな。



今度は○○という教材ね。どんな活動をさせましょうか。

1. 「付けたい力」が出発点

「次は、この教材だね。どうやって教えようか」

職員室でしばしば聞かれる会話です。しかし、ちょっと待ってください。教材を教えることが大切なのでしょうか。それとも、その教材を通して、学力を育成することが大切なのでしょうか。

もしその教材そのものを教えることが大切なのであるなら、日本中の子どもたちが同じ教材で学ばなければならないはずですが、実際には、教科書の教材は様々です。教材は、学力育成のためのツールの一つに過ぎず、私たちはそのツールを用いて、あるいはそれ以外のツールをも活用して、子どもたちに身に付けさせるべき学力を育成していくのです。

ですから、本来は、

「次に子どもたちに付けたい力はこれこれだね。どんな活動、どんな教材を用いたら、楽しく力の付く授業ができるだろう」

と話し合うべきでしょう。

「教科書を教えるのではない。教科書で教えるのだ」とは、昔からよく言われてきたことです。さらにもう一步を進めて、「教科書を教えるのではない。学力を育成するために、教科書やその他の資料を活用するのだ」と考えるようにしたいものです。

2. 育てる学力を偏らせない

教材→学習活動→評価規準の順で単元を構想していくと、一年間を通してバランスよく学力を育

成していくことが困難になります。

国語科の物語文の指導を例にとって考えてみましょう。どの教材でも、音読は大切です。しかし指導にあたって音読ばかりを大切にしていたら、音読の力は育つかもかもしれませんが、他の指導内容がおろそかになってしまうということも考えられます。まずは一年間で育てるべき学力を明らかにし、その評価規準を明確にしたうえで、それを実現するに適した学習活動や教材を考えていきたいものです。

「学習指導要領の指導事項のうち、〇〇の力を育てていこう。そのためには〇〇のような活動が有効だろう。そして、その活動を行わせるのには〇〇という教材が適しているようだ」

このように発想して年間指導計画を立てることで、学習指導要領に示された指導事項をバランスよく指導することができるようになります。

3. 学習指導案の形式を変える

学習指導案を書く場合、単元の学習指導計画では、「学習活動→評価規準」という枠組みで記述するのが一般的なようです。しかしこれでは、学習活動が決まった後に評価規準を考えることになり、また、付けたい力を意図的・計画的に育てることが困難になります。

思い切って、「評価規準→学習活動」の枠組みで学習指導案を書いてみてはどうでしょうか。その単元で付けたい力が明らかになり、授業が焦点化されるのはもちろんのこと、実はどんな学習活動をさせたらよいのかについても考えやすくなると思うのです。

付けたい力から考えていくことで、授業づくりがやりやすくなったわ。



●●● 現職教師の声

私は音楽専科をやっていますが、今までは、「次はこの題材だから、○時間でリコーダーをやろう、○時間で歌おう」という活動にばかり視点を向けてしまい、活動に追われがちでした。けれども、教科書はあくまでも教材であることを認識すると、「次はこの題材からどの曲を使って力を付けよう」「和音の移り変わりを楽しみながら合奏するために、この教材を使おう、この楽器を使用しよう」と視点を定めることができました。そうすると、ねらいがはっきりするため、指導がスムーズになるだけでなく、子どもたちもじっくりと活動できるようになりました。

つい時間と活動に追われて大切なことを見落としがちになりますが、出発点を振り返ることを忘れずに取り組んでいきたいです。

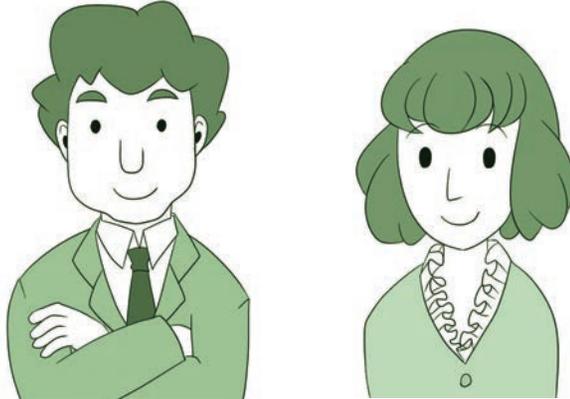
(30代女性・小学校)

第二章

子どもに目標・学習活動・評価を示す授業を

～問題解決能力を高める～

どんな力を育てるために学ぶのか、子どもたちに伝えている？



うちのクラスの子どもたち、言われたことはきちんとするんだけど、自分から進んでやろうとする気持ちが弱いように思うの。

1. これからの授業に求められるもの

これからは、知識・理解の習得だけでなく、それを活用して問題解決する力（思考力・判断力・表現力）を育てると共に、学習意欲を高めることが大切だと言われています。

では、このような授業はどのようにして構想していけばいいのでしょうか。

折り紙で鶴を折るという授業を例に考えてみましょう。

教師が初めの折り方を示します。そして、全員が指示通り折れているのを確かめた後、次の折り方を指示します。このように一つずつ折り方の手順を示し、全員が正しく折れたかどうかを確認しながら授業を進めていくなれば、最後には全員が鶴を折ることができるでしょう。

しかしながら、このような授業において、「子どもたちは自ら考えていたでしょうか」「互いの考えを伝え合っていたでしょうか」そして「学習する喜びを実感していたでしょうか」。

これに対し、折りあがった鶴の形だけを示し、「自分なりに工夫したり、その工夫を伝え合ったりしながら鶴を折ってみよう」という投げかけで授業を進めたらどうでしょう。子どもたちは一生懸命考えることでしょう。いろいろやってみることでしょう。もし、うまい折り方を発見したらうれしくなり、それを友達に伝えることでしょう。そうした教え合いの中で、活発なコミュニケーションも生まれるはずです。

できあがった鶴は何度も折り返されたために、美しくはないかもしれませんが。しかし、子どもたちにとっては、とても価値あるものに感じられるのではないのでしょうか。

2. 学習の道筋やゴールを示す

「先生、これ、終わったよ。次は何するの？」

子どもたちの口からこんな言葉が聞かれるとしたら、おそらくこの教室では、教師が次々と学習活動を指示し、それを遂行することが勉強であるといった学習観での授業が行われているのでしょう。しかし、それでは、「授業は先生の指示を実行するもの」となってしまう、自分で学習をプランニングしたり、自分で方法を工夫して学習を進めたりするクリエイティブ（創造的）な学力が育たないのではないのでしょうか。教師は単元や一時間の授業を始めるに当たり、「どんな力を育てるために（目標）、どんな活動に取り組むのか（学習活動）」をあらかじめ子どもたちに示すとともに、なるべく子ども自身の力で学習を進めていけるようにすることが大切だと思います。

3. 評価の観点についても示す

目標や学習活動を示すということは、評価の観点やその規準についても子どもたちに明らかにしていくということになります。先に述べたような授業の例では、「先生の言うとおりにやっていたのに、なぜ△なの？」といった疑問も出かねません。しかし、自分が目指すべき姿が教師から事前にきちんと示されているならば、子どもたちは教師の評価を納得して受け入れるでしょうし、また、自分のよさや今後の努力点についても理解を深めることができるでしょう。

子どもたちにとって、「いつ、どこで、どんな規準で評価されるのか知らされていない」というのは、いわば評価の闇討ちにあうようなものです。これでは、評価によって児童生徒の学習意欲を高めたり、努力することの喜びを実感させたりすることはできません。

閉ざされた評価から開かれた評価への転換を図っていくことも、授業改善のための有効な手立ての一つだと思います。

●●● 現職教師の声

「板前にとって大事な能力は、美味しい料理を食べた時に、いかに味を言語化して記憶しておくかである。」と、小説の一節にありました。私たち人間はどのような仕事や場面にあっても、曖昧なまま眠っていたものを言語化しながら創造的な活動をしているのだと思います。子どもたちも同じこと。一人一人の中にある考えや気づきなど、もやもやと見えないものを何とか言葉にして伝え合うことは、子どもたちにとって本来楽しいものだと思います。

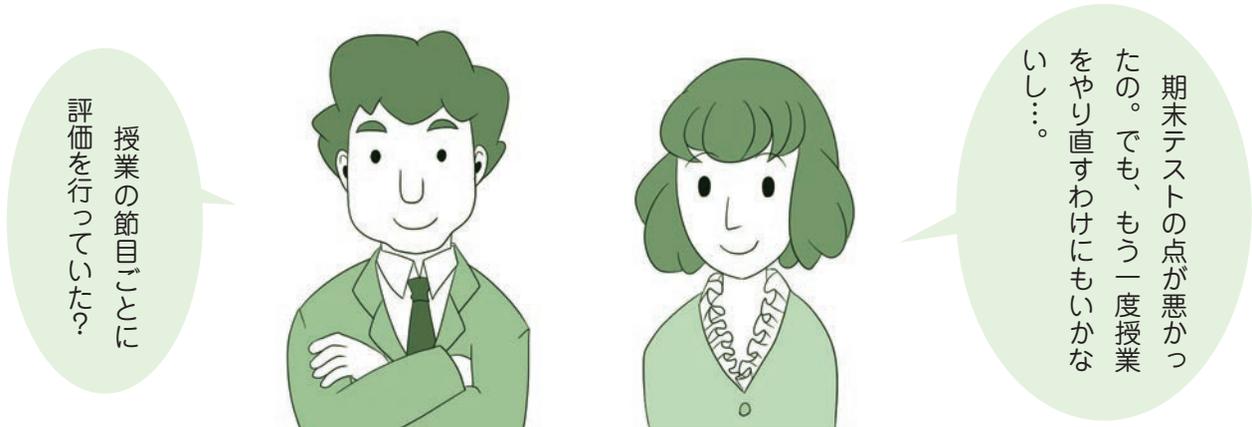
「折り紙、教えてしまえば10分で終わるのに…」、そこをあえて「急がば回れ」で、とことん考えたり話し合ったりする時間を保障することで学びが深まると思います。また、子どもたちは、結果よりも考えたり話し合ったりした過程を評価されることにより、どのような学び手を目指すのかがわかってくるのだと思います。子どもたち自身の力で学習を進めることのできるクラスはそうやって創られるのだと考えています。

(50代女性・小学校)

第二章

評価を大切にした授業を

～「価値を決める評価」から「支援のための評価」へ～



1. 評価という言葉

評価という言葉は、読み下すと「価を評する」、つまり、「価値を論じ、定める」となります。実際に生活の中での使われ方を見ても、「土地の評価額」であるとか「作品の評価が低い」というように、価値を決めるという意味合いで使われることが多いようです。そのため、教育の場においても、評価という言葉からは、テストの採点や通信簿の5段階などをイメージする人が多いかと思います。

しかしながら、教育の世界における評価は少し意味合いが違います。もちろん価値を測るというような意味で使う場合もありますが、本来は「適切な支援を行うために、現状を正しく把握する」ということが評価の役割です。

2. 指導と評価の一体化

単元の学習がすべて終わった後にテストを行うということは日常的に行われることですが、子どもたちの学力育成という面から考えると、あまり効果的な方法ではありません。

例えば、ある子が単元末のテストで50点を取ったとします。この場合、その子は学習の半ばくらいしか理解していなかったと考えられるわけですが、にもかかわらず、授業が次の単元に進んでいるというのであれば、その子にとって残り50点分の学力の回復は望めないことになります。

まずは、学習のプロセスにおいて適切に評価し、必要に応じて指導を行うことが大切です。そうした評価と指導を一体的に、しかも不断に行いつつ、単元の終末においてはすべての子どもたちに、評価規準が実現するように努めていくのです。これが、「指導と評価の一体化」ということです。

また、評価にはもう一つの大切な役割があります。それは、評価結果を基に授業を改善していくということです。子どもたちの学習状況をとらえ、授業の組み立て方を変えたり発問や資料を工夫したりしていく。これが、わかる授業づくりには大切です。この点から考えてみても、単元末のテストだけで評価を行うということが不適切であることは明らかでしょう。

3. 質的評価を大切にする

評価を学習支援に役立て行くためには、教師の評価観を、量的な評価の重視から質的な評価の重視へとシフトすることも大切です。

量的評価観の代表はテストの得点でしょう。しかしながら、テストで測れるのは、学力のほんの一部です。国語科を例にとった場合でも、3つの領域のうち、「話すこと・聞くこと」「書くこと」の学力については、テストで測ることは困難でしょう。「読むこと」についても、テストで測れるのは一部に過ぎないと言われていています。

したがって教師は、子どもたちの話した言葉、書いた文章、学習中の態度等、あらゆるものを評価の材料にして評価活動を行うことが求められます。しかし、子どもたちのあらゆる面を常に評価するというのは現実的な話ではありません。そこで、観点ごとに単元の評価規準を立て、評価方法を明らかにして、そこを中心に評価を行っていくのです。

このように評価規準を明確かつ焦点化して設定し、その実現を図っていくことが、子どもたちに確かな学力を育成していくことにつながります。

●●● 現職教師の声

以前は、評価とは「教えてきた知識や技能が子どもたちにどのくらい身に付いているのかを最後にテストするもの」と考えていました。ですから、各単元の終わりに実技テストやペーパーテストを行い、その結果を「できた」「できない」で簡単に片づけてしまい、評価しっぱなしの状態でした。いわゆる評定をつけるためだけの評価でしかなかったのです。そんな評価を続けていても当然、子どもたちに力は付きません。そこで、単元目標に対して各小単元での評価規準を考え、それを実現させるにはどんな学習活動が必要なのか考えました。単元の途中で観点別評価をすることにより、その結果によってどんな学習支援をしていけばよいのかも見えてくるようになりました。そうした支援をすることによって、子どもたちも単元の途中で何をがんばればよいのが明確となり、結果的に「やる気」にもつながっていきました。このことから、評定をつけるためだけの評価ではなく、子どもたちを育てるために評価をするという認識でいかなければいけないと思いました。

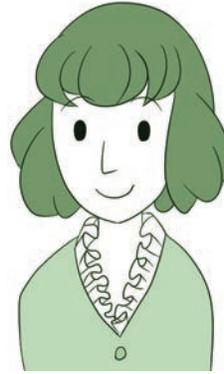
(40代女性・中学校)

第二章

学習の見通しと振り返りを大切にした授業を

～メタ認知能力を育てる～

毎時間の終わりに、なるべく書かせるようにしているのだけれど、同じようなことばかり書くんだよね。



最近、学習の振り返りが大切だということがよく言われますね。

1. 同じような振り返りの多いわけ

学習指導要領の総則「第4 指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項」の中に次のようなことが書かれています。

「各教科等の指導に当たっては、児童（生徒）が学習の見通しを立てたり学習したことを振り返ったりする活動を計画的に取り入れるよう工夫すること。」

これを受けて、教室では今まで以上に振り返りの活動が重視されるようになってきました。しかしながら子どもたちの書いたものを見てみると、「今日の授業は楽しかった」「発言ができてよかった」など、決まりきった言葉が多いようです。こうした言葉からは、今日の授業で何を学んだのか、また疑問点として残ったのはどんなことなのか伝わってきません。したがって、子どもたちの学力育成という面では、あまり役に立たないものとなってしまいますし、教師の授業改善にとっても有益な情報とはなりにくいでしょう。

振り返りに書かれている内容に授業の印象や自分の行動を中心とした言葉が多くなる背景としては、子どもたちに評価の観点を示していないことが考えられます。学年が進んでも、振り返りに書かれている言葉がいつも同じようだという場合には、子どもたちに振り返りの観点を明確に示しているか、教師自身が振り返ってみることが必要なようです。

2. 見通しを立てたことについて振り返る

振り返りで大切なことは、「自分が立てた見通しがどの程度実現できたのか」を振り返ることです。

「見通し」と「振り返り」はセットなのです。

「ここでの学習のめあてはこれで、その実現のためにこんな学習をする」という見通しを一人一人が自覚して学習に取り組んでこそ、学習の最後に「めあてはどこまで実現できたのか。学習方法や取り組み方は適切だったのか」を振り返ることが可能になります。

また、こうした学習を繰り返すことで、子どもたちにメタ認知能力が育つことが期待できます。メタ認知能力とは、「認知している自分を認知する能力」、つまり、自分の学習を対象化し、外側の目で見直す能力であると言ってもいいでしょう。

これからの時代の学び手に求められているのは、「言われたことだけを行う」受け身な姿勢ではなく、「自ら学びを創り上げていく」主体的な姿勢です。そう考えるとき、メタ認知能力の育成がいかにかに大切であるか、ご理解いただけるでしょう。

3. 振り返りを指導に生かす

教師は、単元の中で「付けたい力」を明確にするとともに、子どもたちにはその実現へのゴールをめあてという形で示します。そして、そこに至る道筋も示します（教科の内容によっては、めあてや道筋を子どもたちに考えさせることもあり得ます）。一時間単位で示す場合もあるでしょうし、数時間単位で示すこともあるでしょう。したがって、振り返りについても一時間単位で行うこともあれば、数時間単位で行うこともあります。学習の見通しのもとに行われた児童生徒の振り返りは、特定の子どもの指導を充実させたり、授業のあり方を改善したりする、とても重要な材料となります。

また、振り返りを行わせて各自の課題がはっきりしたら、それを宿題に課すことにより、補充学習の充実を図ることもできます。

振り返りは一般的には授業の最後に行わせますが、それを授業の最初に行わせることで、各自のめあての再確認に生かしていくという方法もあります。

●● 現職教師の声

社会科の学習で、「友達の意見をよく聞いて、その意見につなげて発言できるようにしよう」と指導したことがあった。話し合い自体は、直前の意見につけ足したり反対したりして、活発に行われた。話し合いの前と後で自分の立場が変わる子どもがいて、それなりに考えが深まっているものと評価した。ところが、その日の振り返りカードを見ると、「話し合いで自分と同じ意見の人が多くてうれしかった」「自分が言いたいことを代わりに言ってくれる人がいて楽しかった」「思い切って発言したら賛成してくれる人がいて勇気をもてた」など、その日の学習のねらいとは離れた内容のものがあき愕然とした。

教師側は、学習のはじめにその日のめあてを子どもにはっきりと示し、評価のポイントを伝えることが不可欠であることを痛感し、現在は、板書の中の言葉をキーワードとして指定して振り返りの中に入れるよう指示するなど、評価計画に従ってポイントをしばって振り返らせるようにしている。

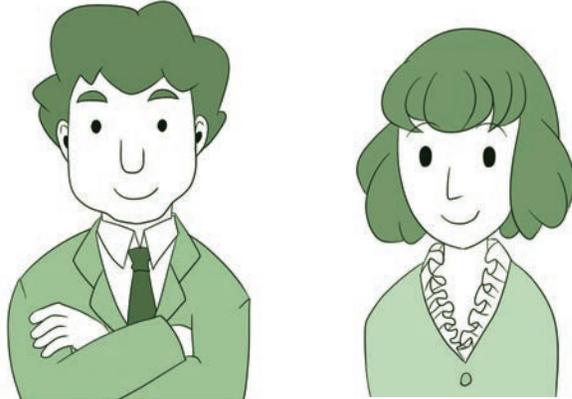
(30代女性・小学校)

第二章

単元を通して学力を育成する授業を

～一時間の授業から単元の授業へ～

それに、導入に時間をかけ過ぎて、時間が足りなくなることでよくあるよね。



毎時間の導入を考えるのって、結構大変よね。

1. 導入・展開・まとめは授業の常識？

「導入の時は盛り上がっていたのだけれど、いざ本題というときには集中力が続かなくなってしまった」とか、「導入に時間をとられてしまい、授業が尻切れトンボになってしまった」という経験をお持ちの方は少なくないのではないかと思います。これでは本末転倒です。そもそも、導入は必ず必要なものなのでしょうか。

長い間、一時間の授業は「導入・展開・まとめ」という展開で構成されるということが、日本の学校教育の、いわば「常識」でした。この「常識」の前提としては、一時間のまとまりで授業を完結させていくという、枠組み優先の考え方があるように思います。しかしながらモジュールに象徴されるように、今は「枠組み」より「子どもたちの実態」や「育成すべき学力」を中心にして考える時代となってきています。

集中力の持続しにくい小学校1年生であるならば、30分の授業を組むことも可能です。それでも、「導入・展開・まとめ」がいるのでしょうか。中学生ともなれば、各自が何時間にもわたって課題追究をすることも可能でしょう。それでも50分ごとに区切って、「導入・展開・まとめ」としなければいけないのでしょうか。初めに枠組みありきではなく、子どもたちの実態や育てたい学力の面から授業を捉え直してみる必要がありそうです。

2. 学力は単元で育てる

「育成すべき学力」を育てるために、単元が構想されます。だとすれば、単元全体の学習を通して

学力が育っていけばいいわけです。よく、一時間の授業だけを見て、「この時間でどんな学力が育ったのか」などという指摘をする方がいらっしゃいますが、正しくは「この単元を通してどんな学力が育ったのか」を問うべきでしょう。

一時間単位の学習にこだわっていると、学習内容を一時間単位で分割して教えるようなことにもなりかねません。その結果として、「この時間は内容が少ないのでゆとりがあるが、次の時間は内容が多いので詰め込みになってしまう」などということさえ起こりかねません。また、個々の学習進度に応じた授業構想なども困難になってしまいます。

3. 評価規準に基づく評価のない時間もあり得る

単元の評価規準を実現するために授業は構想されます。ですから、評価規準は単元全体を通して実現されればよいわけです。したがって、評価規準に基づく評価がない時間というものもあり得ます。例えば、国語科の授業において物語文を読む学習を考えてみましょう。評価規準には、読み取りの能力に関するものが立てられていたとします。その一時間目、子どもたちは、教材文の範読を聞いた後、自分の読みを確かにするために何度か繰り返して黙読していたとします。この場合、子どもたちはまだ自分たちの読み取ったことを表現するまでには至っていないわけですから、読み取りについての評価規準は適応できないことになります。

ただ、ここで間違っはいけないことは、評価規準に基づく評価はないが、日常的な意味での指導と評価はあるということです。学習姿勢に関するもの、黙読の方法に関するものなど様々な面で教師は子どもたちの学習を評価し、適切な指導を行っていきます。

「単元を通して学力を育成する」ということが一時間の授業をおろそかにしてもよいということではないことは、言うまでもありません。

●● 現職教師の声

国語の授業で狂言を取り上げるに当たり、単元を通して「昔の人のものの見方や感じ方について考えよう」を目標に学習を進めることにしました。はじめは狂言の独特な話し方や動作のおもしろさから「狂言って楽しいね」としか思わなかった子どもたちも、解説文に触れることで、狂言が一体どんなことを人々に伝えたいのか、どんなことをテーマにしているのかなどを考えるようになってきました。そのことを確かめるために複数の狂言作品を読んだところ、狂言の内容がもつ共通点を見出したり、伝統文化として受け継がれている意味を考えたりするようになり、単元のまとめでは、「今生きている自分たちも狂言のお話に共感できるしおもしろいと感じるのだから、きっと昔の人たちも今の自分たちと同じように、みんなが共感しておもしろいと感じたのだろう」という考えにたどり着くことができました。

これが今年一年、単元として授業を考えて一番手応えのあったことでした。

(20代女性・小学校)

第二章

学習課題を工夫した授業を

～子どもたちの学習意欲が高まる課題づくり～



1. 授業づくりはドラマづくり

授業づくりは、テレビや映画のドラマづくりに例えられることがあります。授業にもドラマと同じように、「オープニング（学習課題の提示）からクライマックス（学習活動）そしてエンディング（学習成果の評価）」に至るシナリオ（授業構成）が必要であるということの例えです。

もちろん、授業づくりのシナリオのエンディングに求められるのは、「その授業で育てたい能力などが確実に身に付くこと」です。

では、オープニングに求められることは何でしょうか。それは、「子どもたちが学習に興味・関心を持ち、学習活動に引き込まれていくこと」と言えるのではないのでしょうか。

2. オープニングで大切なこと

オープニングはたいていの場合、課題提示から始まります。この課題の良し悪しが、子どもたちの学習意欲に大きくかかわってきます。

では、学習意欲を高めるような課題とはどんなものでしょう。

一つは「やってみたい、考えてみたいと思えるような、面白い課題」であることです。

例えば、子どもたちの興味・関心を高め、面白いや楽しいを実感させるために、子どもたちの身近な出来事や毎日の生活に根ざしたところから課題を作ったり、世界のニュースやトピック的な話題と関連づけた課題を工夫したり、他の教科やこれまでの授業等に関連づけた課題を提示したりすることなどが考えられます。

そしてもう一つは「(自分にとって) 価値がある課題であること」です。

自分にとって学習する価値があるということを実感させるためには、その後の生活に役立つような実用性を考慮して課題を設定したり、人のためや社会貢献につながるような課題を工夫したりすることなども有効です。

学習課題に興味・関心が湧き、必然性を納得すれば、子どもは自ら学習に取り組んでいくことでしょう。

3. エンディングと結びつくこと

ただ、オープニングの工夫ばかりに気を取られ、それが、その後のクライマックスやエンディングの充実に結びつかないとしたら、何の意味もありません。オープニングの工夫は、あくまでも学力形成のためにこそ大切なのです。

先に、エンディングに求められるのは、「その授業で育てたい能力などが確実に身に付くこと」であると書きました。どんなにオープニングで興味・関心を掻き立てたとしても、それを追究することで子どもたちの学びが深まっていかなければ、結果として、いわゆる「活動あって学びなし」の授業となってしまいます。

教師には、子どもたちとのさまざまなやりとりの具体的な場面を想定しながらシナリオを計画的に考え、オープニングから確実にこのエンディングにたどり着くためのシナリオづくり、すなわち全体構成を考える能力（授業構想力）が求められるわけです。

子どもたちと共にいいドラマをつくりたいものですね。

●● 現職教師の声

新しい単元に入る時に、その単元の学習目標と評価の方法、展開等を伝え、学習の見通しをもたせます。さらに、私は生徒と一緒に考えながら、単元名のオリジナル化を行います。学習の課題意識が高まるからです。例えば、平家物語の学習では、「声とことばで源平合戦を再現しよう」ともちかけ、グループごとに音読を工夫させましたが、その時のネーミングは、「武士の戦いと美学」というものでした。

また、学習状況が高まっていく過程を生徒が自分で確認できるようにしたいので、一時間の授業ごとに学習目標を提示し、最後に振り返りをさせています。この授業の場合、対抗戦のような形で音読の工夫を競わせましたので、振り返りは「戦評定」と名付けました。生徒は、毎時間、勝つための工夫を書きためてきているので、単元の最後では、学びの実感のある振り返りを行うことができました。

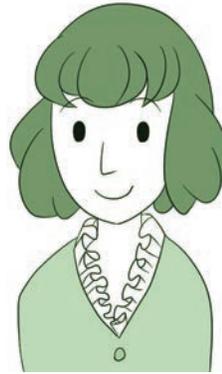
(50代男性・中学校)

第二章

「わからない」を大切にした授業を

～一部の子どもたちだけと授業を進めない～

それだとわからない子は参加しにくいね。そもそもわからないから授業をするんだから、「わからない」を大切にしたい見直しが必要だよ。



授業で「これわかる人いる？」って聞くと元気よく手を挙げてくれる子がいて、授業がすごくスムーズに進むの。でも、これでいいのかなあ？

1. まず授業を進める前提は？

算数の時間、「この問題、わかった人は？」と先生が問題を出すと、何人かの子どもが手を挙げました。そこで先生は、「では、〇〇さん、黒板にでてやってごらん」と、一人の子どもを指名して、授業を進めていきました。

教室では当たり前のようにみられる光景です。しかし、このやりとりの中にはいろいろ考えなくてはならないことが含まれているように思います。

まず、教師が授業を進めるために相手にしているのは「わかっている子」です。しかし、子どもはわからないから学習するわけで、わからないことをわかるようにするのが授業です。とすれば、授業を進める前提は「わかる人」ではなく「わからない人」であるべきでしょう。

また、子どもたちの中にはいろいろなタイプがあり、自分の考えをまとめるためにはじっくりと考える時間を必要とする子もいます。にもかかわらず、すぐにわかる子を指名してしまったら、その子はどう思うでしょう。「僕にはわからなかった。〇〇さんはすごいな」

2. 「わかる」とは？

教師は割合に軽く「わかる」という言葉を使いますが、子どもの実態や状況を見ると、「わかる」にもいくつかの段階があることがわかります。

第一段階は、「今まで知らなかったことを知る」あるいは、「わからないと思っていたことがわかるようになる」という状態です。基礎的・基本的な知識や技能を習得した段階と言ってもいいでしょ

う。

第二段階はもう少し深化して、「知識としてわかるだけでなく、自分で使えるようになる」という状態です。基礎的な知識・技能が活用できるようになった段階とも言えます。

もう一段上の第三段階は「わかったことについて活用できるだけでなく、他者に対して自分の言葉で説明できる」という状態です。探求、創造につながる段階とも言えます。

ここで先ほどの授業の例を振り返ってみましょう。先生が問いを發し、子どもたちがそれに答えるという授業では、第一段階の「わかる」は実現するかもしれませんが、第二段階、第三段階の「わかる」までは深められないのではないのでしょうか。

3. どうすればいい？

そう考えていくと、授業を見直すポイントが見えてくるように思います。

まず、一人一人の子どもに十分に考える時間を与え、「わかったことは何か、まだわかっていないことは何か」をはっきりとさせます。そして、「まだわかっていないこと」を全員の前で発表してもらいます。この際大切なことは、子どもたちの「わからない」が大切にされるクラスを作っておくということです。「恥ずかしくて、わからないなんて言えない」とか、「わからないと言ったら笑われてしまいそう」などと子どもが思うようなクラスであれば、心の中では強く「わかりたい」と思っている子であっても、「ここがわかりません」などとは決して言わないでしょう。

さて、友達の「わからない」が明らかになったら、それを「わかる」に変えていくために、言語活動の充実を図りながら、クラス皆で学び合うようにさせることが大切です。一緒に話し合う、他の場面に置き換えて考えてみる、わかった子がわからない子に説明するなど、いろいろな学び方が考えられます。「わかる」授業をするために、「わからない」を大切に、「わかる」段階を深化させていく。そういう授業展開を工夫したいものです。

●●● 現職教師の声

今までは「わかる」という児童の実態の三段階について、意識して考えていませんでした。児童は、教師の思い描いている答えに近づこうとして発言する場合があります。その答えで教師が満足して次へ進んでしまうことは恐ろしいことだと思いました。

単元全体を通して、どのような力を身に付けさせるのかをしっかりと意識して授業を展開していけば、「わかる」の段階をどこまで深化させるべきかが見えてくると思いました。

児童の「わかりたい」という学習意欲を大切に、一人一人に本時の課題を自覚させ、課題と向き合う時間を保障した後で、課題解決のために協力、協調し切磋琢磨し合うという授業展開をしていけば、理解の深まりも得られると思いますし、よりよい人間関係も醸成できると思います。児童が伸びやかに自分の疑問や考えを発言できる学級風土の確立は、何にも増して大切なことであり確かな学びに繋がるということを再認識し、日々の教育活動を行っていきたいと思います。

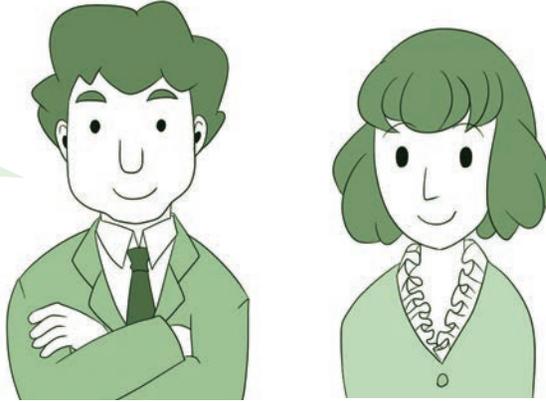
(50代女性・小学校)

第二章

共に学び合う授業を

～教室という空間のすばらしさを実感させる～

子どもたちの頭の中はど
うだったのかな。静かに聞
かせるだけで満足しないで、
授業の中で子どもたちが自
分の考えを説明し合うよう
な活動も大切にしたいね。



今日の授業はとっても
うまく説明できたの。子ども
たちもとっても静かに聞いて
いたけど、活気がないの。
これでいいのかしら？

1. 講義型の一方的な授業から脱却しよう

教師にとって、「うまく説明できる」話術は必要な授業力の一つです。しかし、いつも聞いているだけの授業では、子どもの学習意欲は減退してしまうし、思考も停滞しがちになってしまうことでしょう。これからの時代を生きる子どもたちに必要なのは、「学ぶ意欲」と「考える力」だと言われています。そうした力を育てていくには、教師が一方的に知識を教え込むだけの授業では、あまり効果があがりません。子どもたちがどうしたら意欲的に学ぶか、どうしたら考える力を育てていくことができるか、そんな観点から日頃の授業を見直してみましょう。

2. 共に学び合う授業をつくる

子どもの学びの形態には、教師から教わる学びのほかに、子ども自らが学ぶ学びや、友達と一緒に学び合うような学びがあります。授業の中に、教師が知識や情報を伝えるだけでなく、子ども自らが学ぶ場面や共に学び合う場面をバランスよく取り入れていくことが大切です。

中でも、これからの時代の教育では、「共に学び合う授業」を大切にしていってほしいと言われていきます。なぜでしょう。

「共に学び合う授業」を心がけることで、さまざまな効果が期待できます。

第一の効果として考えられることは、教師の話聞くという受け身の学習姿勢から自らも発言するという能動的な学習姿勢に変わること、子どもの学びが主体的になるということです。

第二の効果として期待できるのは、言語活動の充実が図れることです。友達と話し合ったり教え

合ったりする学習活動を繰り返す中で、知識を活用する力が育っていくということです。よく言われることですが、友達に教えるということは、教えられた子どもの理解が深まるだけでなく、教えた子どもの理解も深まります。こうした学び合いによって、これからの時代を生きていく子どもに求められる「思考力・判断力・表現力等」が育っていくことが期待できます。

第三の効果として、共に学び合うことにより他者の考え方や見方を知り、他者の考える過程に気づくということがあげられるでしょう。他者の思考を自分の考え方と比較することで、メタ認知する力が育ちます。また、他者の思考をヒントにして、自分の思考を再構築することもできます。さらには、競争心なども働いて、学習のモチベーションを高め合うことも期待できるでしょう。

それだけではありません。共に学び合うことは、質の高い学びの集団づくり、そして共に学び合い高め合う友を得ることにもつながっていきます。共に学び合う授業が行われている時間は、まさに教室という空間のすばらしさを実感させてくれる、貴重な時間といえるでしょう。

3. 共に学び合う授業を効果的にする条件

共に学び合う授業を効果的にするにはいくつかの条件があります。

その一つが、学びの規範づくりです。具体的に言えば、人の意見をあたたかく聴く、人にやさしく話すなどの授業規律を確立することです。これが質の高い学びの集団づくりの核になります。

また、各学級、各教科の授業でそれぞれ教師がバラバラに学び合い学習を進めても効果的なものとはなりません。学校として、組織的かつ総合的な取り組みをすることが求められます。

しかし、最も大切なのは、学び合いの指導者、すなわち教師自身が学び合いの意義や効果を理解し、実感することです。そのためには、学校という職場において、教師自らが学び合う存在でなければなりません。他の先生方と共に学び合うという姿勢を、常に忘れてたくないものです。

●●● 現職教師の声

授業中に、「これだから教師はやめられない」と思うような、わくわくする経験をすることがあります。例えば、その子らしさやその子のよさが十分発揮されたとき、子どもが教師の予想を超える活動をしたときなどです。「その発想はじつに君らしい。しかもユニークだ。」「私も気がつかなかったよ。どうして、そう考えるようになったの?」そんな言葉を、思わずかけてしまいます。

言語活動の活性化された、共に学び合う授業では、その子らしい気づきや、より練られた考えが生まれてきます。また、お互いを認め合うことが増えるので、子どもの自己肯定感が高まり、他者受容も促進されます。「学び愛」という言葉があるそうですが、まさに実感されます。

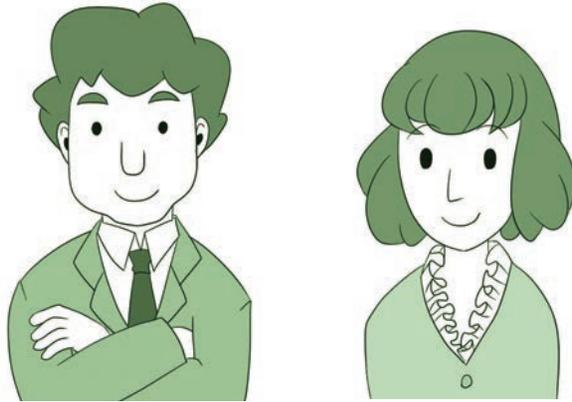
(50代男性・中学校)

第二章

教師にとっても楽しい授業を

～つまらなそうな表情の教師から楽しい授業は生まれない～

そうだね。子どもたちの
気持ちを活性化するために
も、授業中の自分の表情を
振り返ることは大事だね。



授業の時、子どもたち
は私の表情をどんなふう
に見ているのかしら？
とても気になるわ。

1. どんな表情で授業していますか？

楽しさや意欲、やる気は伝染するものです。当たり前のことだと思うのですが、つまらなそうに授業をする教師の顔を一時間、さらにいえば一年間も見続けるとしたら子どもたちの学習意欲も湧くわけがありません。子どもたちにとって教師の表情は、教師が想像している以上に影響力のあるものです。教師の仕事は、目の前にいる子どもたちの意欲ややる気を呼び起こし、活性化させるところから始まります。だから、何よりも教師自身が元気で意欲的であり、表情豊かで、周りの子どもたちに活力を感じさせる存在でなければなりません。

子どもの話を聴くときの顔、姿勢、雰囲気、子どもに話すときの声の大きさ、声の質・高さ、話し方や間の取り方等をよく自覚して、授業の中で、的確にいろいろな表情ができることは、教師の授業力のとても大事な要素の一つです。普段、自分はどんな表情をしているか、また、子どもたちはどんなふうに分をみているのか、そういう観点から自分を改めて振り返ってみましょう。

2. 豊かな表情は授業に取り組む姿勢から

日々、自分の表情を意識することが大切だと述べましたが、しかしそれが上っ面だけのものであったなら長続きはしないでしょうし、やがては子どもたちに見抜かれてしまうことでしょう。では、どうすれば豊かな表情が継続的にできるようになるのでしょうか？

まずは、授業づくりに教師自身がワクワクし、内面的にとときめくことが必要だと思います。たとえば子どもに興味・関心を抱かせるためにどのような素材や題材を工夫するか、子どもに自ら取り

組む意欲を出させるためにどういう授業設計をするか等、まさに子どもに寄り添う意識と姿勢で授業を作っていくのです。授業のオリジナリティが高ければ高いほど、ときめき感やワクワク感が高まります。そしてそれが、教師の表情を豊かなものにしていきます。

もう一つは、子どもたちの声に耳を傾けることです。

教師が一方向的にアウトプットするだけの授業では、教師にとっての発見がありません。ですから、教師の表情も次第にマンネリ化してしまいがちです。

しかし、子どもたちの声を一生懸命に聴くように心がけ始めると、授業が面白いものを感じられるようになります。「ああ、こんなふうに思っていたのか」「なるほど、こんな考え方もあるのか」「おや、この子にはこんなよさもあるのか」など、たくさんの発見に出会い、感動をもらうことができます。子どもたちの発言や発想から感動をもらう。教師として一番うれしいことではないでしょうか。そんな時には、知らず知らずのうちに笑顔になっていることでしょう。

3. やりがい、そして生き甲斐

教師にとっての授業ということを考えてみると、「子どもたちの成長を支援することを通して、教師自身が自己実現し、成長していく場である」ということができるかと思います。ですから、子どもたちが授業を楽しんでいる姿を見たり、確かな学力を育てていることを実感したりすることは、教師自身のやりがいや生き甲斐を高めることにつながります。それが、教師の表情の豊かさに表れます。そして、その豊かな表情がまた、子どもたちに楽しい学びを提供していくことにつながっていくのだと思います。

●●● 現職教師の声

4年生の社会科で、三浦半島の気候や特色についての学習で導入に悩んでいたところ、先輩の先生から「三浦大根を見せればいいよ。」とのアドバイスをいただいた。早速、三浦の農家から取り寄せた三浦大根は、長さ60センチ、重さ6キロもあり、自分自身も驚いた。きっと子どもたちも驚くだろうと、とてもわくわくしたのを覚えている。この巨大な大根を見たら、何とかな、どうしてこんな大根ができたのか、そこから土地の様子や気候に着目できるかな…。とても楽しみながら教材研究ができた。

こちらが準備した学習に対して子どもたちがどんな反応をするだろうと思うと、自然に子どもたちの考えを聴くのが楽しみになる。予想していなかった考えに驚きや感心することも多い。そこから「ああ、この子はこんな見方をするんだ」と、児童理解につながっていくこともある。子どもたちが学習に集中して話し合いが盛り上がると私も楽しくなってくる。そのためにも日々教材研究を大切にしていきたいと思っている。

(30代女性・小学校)

おわりに

教育は、誰もが語れる。そのことはよいことであるが、時に、今日の教育とは異なる過去の教育に依拠することにもつながる。それは、自分の受けてきた教育を元に、今日の教育を語るからでもある。このことを、原体験に依拠した教育論という。

原体験に依拠した教育論を語ることは、必要である。しかし、過去を見るだけで、未来を見ることのない教育論を展開しても、これからの時代に生きる子どもたちに機能する教育を行うことはできない。「未来は、教育によって創られる」といっても過言ではない。学校教育で育成されなくてはならないのは、子どもたちがこれからの時代を生きていくのに必要な学力である。そのためには教師一人一人が、過去に学びつつも、これからの時代が求める学力を学校教育における授業で具体化することが大切である。ここに、教師の専門性が求められる。

「教師になる」ことで完結するのではなく、「教師として成長し続ける」ためには何をすべきか。今の学校で、何をすることが未来を生きる子どもたちのためになるのか。本書は、そうした問いに対する、一つの提案である。

この提案を実現するために何より大切なのは、若い教師や中堅の教師、さらにベテランの教師がそれぞれの役割や立場で一緒になって、チームとしての学校教育を行っていくことにほかならない。

私たち教育デザインセンターは、学校教育に関わる全ての方々と手を携え、新しい教育づくり、子どもたちが生き生きと学ぶ学校づくりのために微力を尽くしていきたいと考えています。

横浜国立大学教育人間科学部附属教育デザインセンター長 高木展郎

「教師として成長し続けるために」 ベテランの先生に贈る 20 のメッセージ

2012年3月 発行

編集・発行 横浜国立大学教育人間科学部附属教育デザインセンター
〒240-8501 横浜市保土ヶ谷区常盤台79-2
TEL・FAX 045-339-3481
E-mail edu-design@mlynu.ac.jp
印刷所 (有)中溝グラフィック

この冊子は、文部科学省特別経費「教育デザインセンターをハブとした都市型総合大学における教員養成システムの構築」事業の予算によって作成いたしました。